

2019年度自己点検評価報告書

2020. 2. 25

文学部評価分科会

2019年度の自己点検評価活動は、以下の点検項目について重点的に行った。

<点検項目>

IV 教育課程・学習内容

1. 現状の説明

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

すでにカリキュラムポリシーを詳細に定めて履修要項等に明記し、それにしたがって教育課程を体系的に編成している。(根拠資料1) そのポイントは以下の12項目であり、各項目について現状を説明する。

- (1) 初年次教育(「初年次セミナー」(<1年次必修>と「人間学」<年次選択必修>)
- (2) 初年次教育と専門教育の架橋およびキャリアへの意識づけ(「文学部の学びとライフデザイン」<2年次選択必修>)
- (3) メジャー体制(8メジャーと社会福祉専修)の専門教育
- (4) 各メジャー・専修ごとのイントロダクトリー・ベーシック・アドヴァンストの段階別科目編成
- (5) 言語系科目の重視
- (6) 専門教育と人間教育の拠点(「演習Ⅰ～Ⅳ」<3・4年次必修>)
- (7) 卒業研究(「卒業論文研究Ⅰ・Ⅱ」<4年次必修>)
- (8) EMP科目群
- (9) 講義科目におけるアクティブ・ラーニング
- (10) その他の科目におけるアクティブ・ラーニング
- (11) カリキュラム・マップ
- (12) 成績評価

これらの各項目が掲げる目標がどれほど適切かつ体系的に達成されているかを点検するため、学生の満足度調査と各メジャーの教員たちによる分析を行ったので、以下にそれを示して現状を説明する。もちろん、こうした教育課程の編成・実施の方針およびそれにもとづく授業科目の開設が本学部の学位課程にふさわしいものかどうかの検証は、現役学生の主観的な満足度や教員の分析によるだけでなく、卒業生が社会でどれほど活躍し実績を挙げているかなど、より客観的な指標によって行なわれるべきであるが、それらの点は今後の課題としたい。

はじめに、学生の満足度調査の結果を示す。

A. 学生の満足度調査から

上記 12 項目のうち、(1)～(4)(6)(9)(10)(11) の 8 項目についての学生の満足度を問うアンケート調査（2019 年 11 月～2020 年 1 月）を行い、247 名から回答を得た。

(11)については、新規開設科目の要望を聴いた。学生の学籍年度別の回答数の内訳は、2015 年度以前生 18 (7.3%)、2016 年度生 41 (16.6%)、2017 年度生 58 (23.5%)、2018 年度生 63 (25.5%)、2019 年度生 67 (27.1%) であった。また、各項目で示すグラフは棒グラフによる 5 点法で満足度・理解度・接合度の結果を示している。評価は 1 に近いほど低く、5 に近いほど高い。（ただし、「文学部の学びとライフデザイン」と「演習（ゼミ）」はのぞく）

(1) 初年次教育：「初年次セミナー」と「人間学」（ともに 1 年次科目）

「初年次セミナー」

あなたは、文学部の必修科目「初年次セミナー」の授業に満足しましたか。

130 件の回答

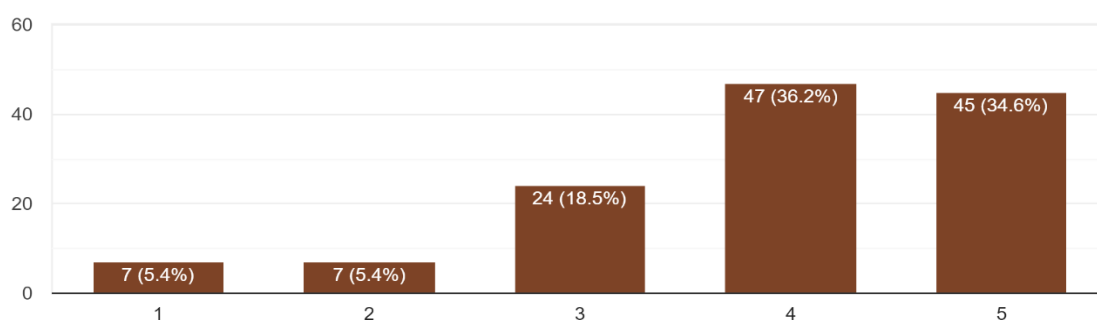


図 1-1 「初年次セミナー」満足度（2018-2019 年度入学生）

図 1-1 は「初年次セミナー」の満足度である。「初年次セミナー」の満足度は 4 と 5 を合わせると、68.8%の学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 10.8%であることからみても、総じて満足度は高いといえる。

あなたは、文学部の必修科目「初年次セミナー」の...っていると思いますか。それとも思いませんか。
130件の回答

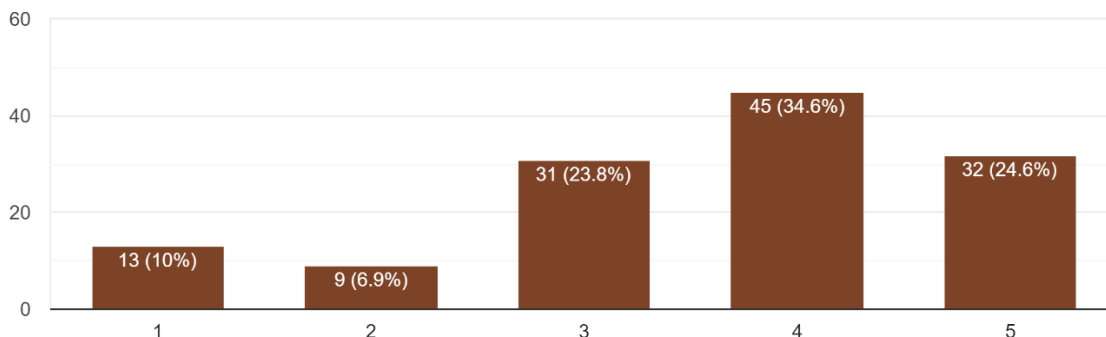


図 1-2 「初年次セミナー」と現在の勉学への接合（2018-2019 年度入学生）

また、「初年次セミナー」が現在の勉学に接合していると考えている学生は、4 と 5 の回答者が 59.2%と 6 割近くになっている（図 1-2）。本科目は、その後の勉学への接合に一定の成果を果たしているといえる。しかし、その一方で、16.9%の学生がそう思わないと回答している。今後、文学部全体、各メジャーの学びを点検し、必要な措置を講じるべきであろう。

「人間学」

あなたは、文学部の必修科目「人間学」の授業に満足しましたか。
247件の回答

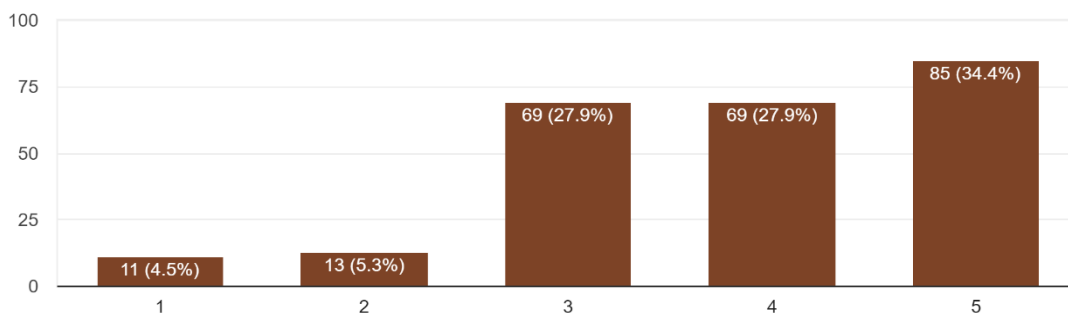


図 1-3 「人間学」満足度（全年度生）

図 1-3 は「人間学」の満足度である。「人間学」の満足度は 4 と 5 を合わせると、62.3%の学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 9.8%であることからみても、総じて満足度は高いといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3

の回答者が 27.9%いることは反省すべき点であろう。この学生層にどのように訴求するのか、本授業の内容を点検する必要がある。

あなたは、文学部の必修科目「人間学」の授業を理...きましたか。それとも理解できませんでしたか。
247 件の回答

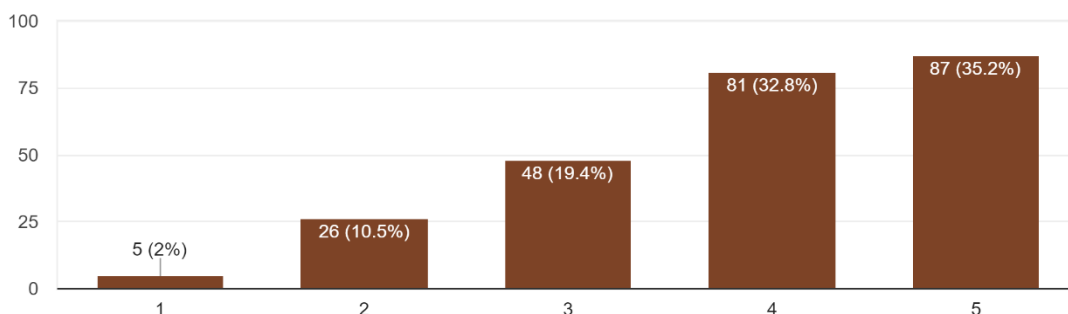


図 1-4 「人間学」理解度（全年度生）

図 1-4 は「人間学」の理解度である。「人間学」の理解度は 4 と 5 を合わせると、68.0%の学生が理解できた回答している。理解できていない 1 と 2 の回答者が 12.5%であることからみても、総じて学生の理解度は高いといえる。今後は、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 19.4%の学生をふくめて、いかに理解度を高めていくのかについて本授業の内容を点検する必要がある。

あなたは、文学部の必修科目「人間学」の授業が、...ますか。それとも役立っていると思いませんか。
247 件の回答

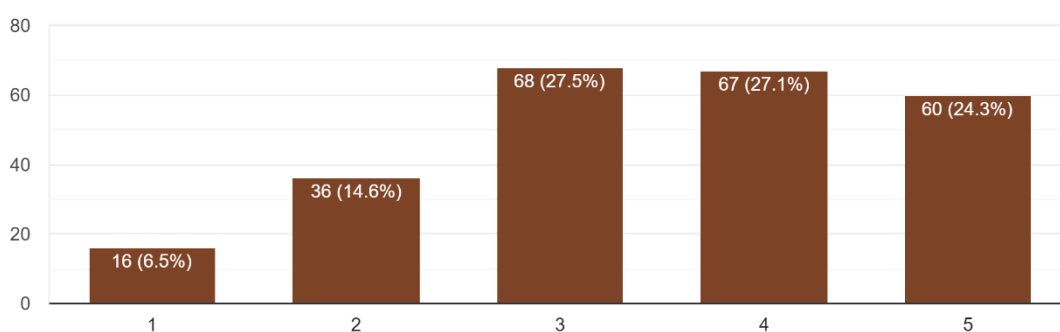


図 1-5 「人間学」と現在の勉学への接合（全年度生）

図 1-5 は「人間学」とその他の勉学との接合度である。「人間学」の他の勉学への接合度は「役にたっている」に該当する 4 と 5 を合わせると、51.40%となる。本科目が文学部の必

修科目であることを鑑みると、この結果については厳しくとらえる必要がある。「どちらともいえない」が27.5%、「役に立っていない」が1と2を合わせると21.1%と全体の半数に近い。今後は、科目そのものの満足度が高い「人間学」と、他科目の連動性やシームレス化の方法・内容を考える必要がある。

(2) 初年次教育と専門教育の架橋およびキャリアへの意識づけ：「文学部の学びとライフデザイン」(2年次科目)

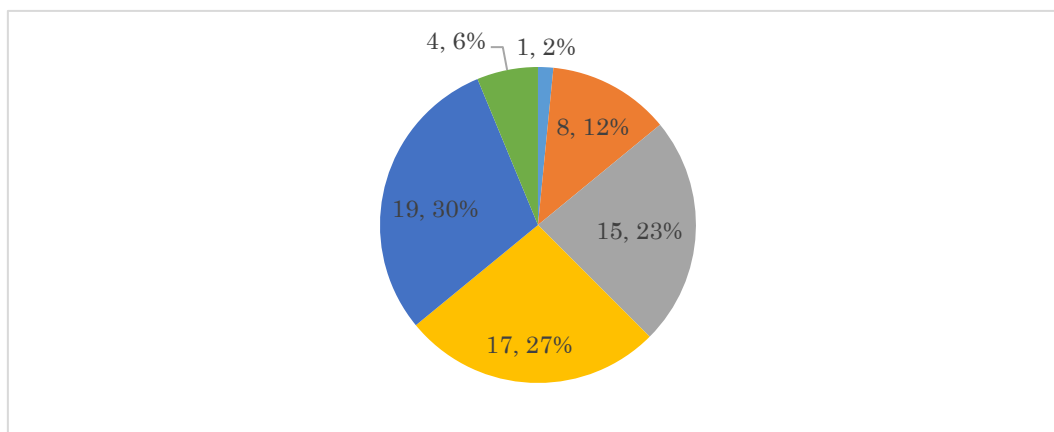


図 2-1 「文学部の学びとライフデザイン」満足度 (2018 年度入学生)

図 2-1 は「文学部の学びとライフデザイン」の満足度である。同科目は2018年度新カリキュラムで「アカデミックスキル応用」を改編して新しく設置された。そのため、他の項目より満足度を詳細に質問した。

同科目の満足度をみると、「とても満足」が30%、「満足」が27%で両者を合わせると57%と6割近い数値となった。また、「どちらともいえない」が23%、「満足していない」が12%、「まったく満足していない」が2%、「履修していない」が1.2%となった。

これらの結果から、試行錯誤が多かった初年次としては学生の満足度を高めることができたといえるが、「満足していない」と、「まったく満足していない」学生が14%いたことは、真摯に反省すべきである。

下記の図 2-2 は「文学部の学びとライフデザイン」の他の勉学への接合度である。これをみると、同科目の他の勉学への接合度は「役にたっている」に該当する4と5を合わせると、55%となる。その一方で、「どちらともいえない」が23%、「役に立っていない」が16%であった。本科目は、文学部のキャリア科目という位置づけで開講されているため、他科目との接合は必ずしも容易ではないが、来年度から少しでも他科目との接合度を高めることができるような工夫が必要である。

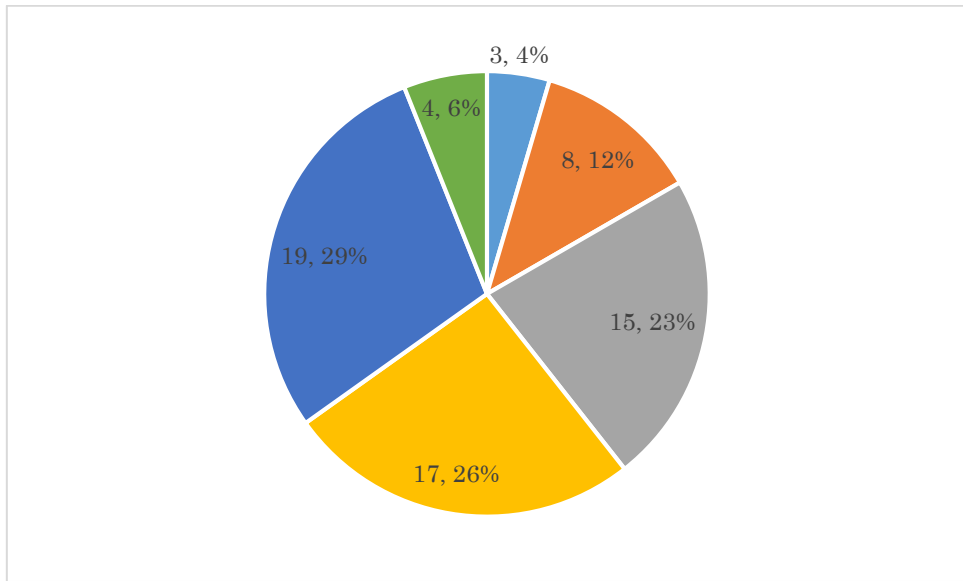


図 2-2 「文学部の学びとライフデザイン」とほかの勉学への接合（2018 年度入学生）

（3）メジャー体制の専門教育

下記の図 3 は、メジャー制への意見である。これをみると、「賛成」が 34.8%、「とても賛成」が 44.5%と全体の 8 割に近い 79.3%の学生が賛成している。一方、「やや反対」が 2.4%、「とても反対」が 3.2%と反対はわずか 5.6%にとどまる。これらの結果から、メジャー制が文学部生に大きく支持されていることがわかる。

あなたは、文学部のメジャー制についてどう思いますか。
247 件の回答

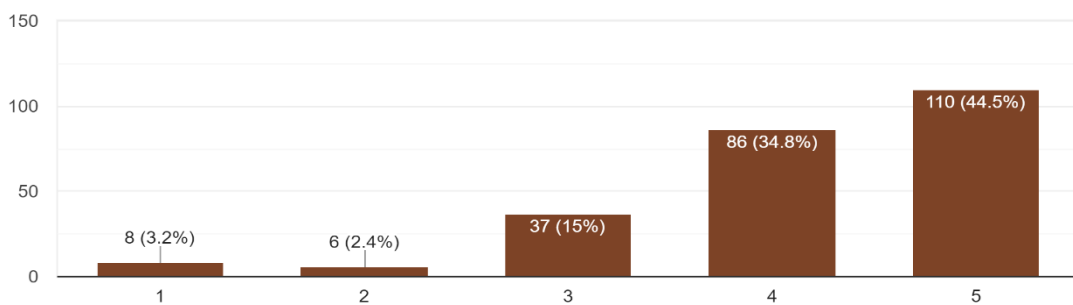


図 3 「メジャー制への意見」（全年度生）

（4）各メジャー・専修ごとのイントロダクトリー・ベーシック・アドヴァンストの段階別科目編成

あなたは、希望するメジャー・専修のイントロダクトリー科目の授業に満足していますか。

130 件の回答

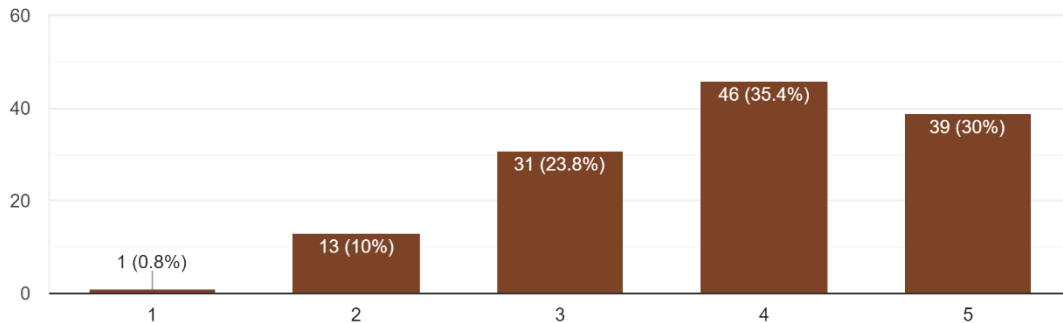


図 4-1 「イントロダクトリー科目」満足度（2018-2019 年度入学生）

図 4-1 は、現 1～2 年生の希望するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の満足度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、65.4%の学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 10.8% であることからみても、「イントロダクトリー科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 23.8%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

あなたは、所属するメジャー・専修のイントロダク...足していますか。それとも満足していませんか。

149 件の回答

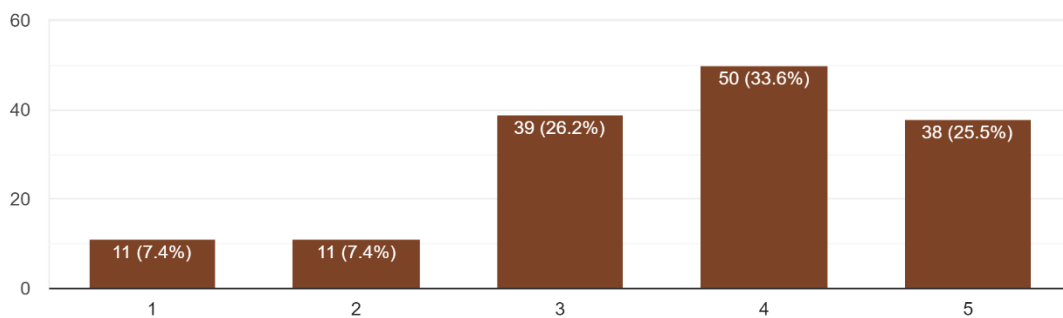


図 4-2 「イントロダクトリー科目」満足度（2017 年度以前入学者）

図 4-2 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の満足度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の満足度は 4 と 5 を合わせる

と、59.1%の学生が「満足している」と回答している。図 4-1 で示したメジャー・専修に所属前の学生と比較すると満足度はやや低くなる。しかし、「満足していない」1と2の回答者は14.8%にとどまっており、メジャー・専修に所属後の学生に対しても「イントロダクトリー科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する3の回答者が26.2%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

あなたは、希望するメジャー・専修のイントロダク...きましたか。それとも理解できませんでしたか。
130件の回答

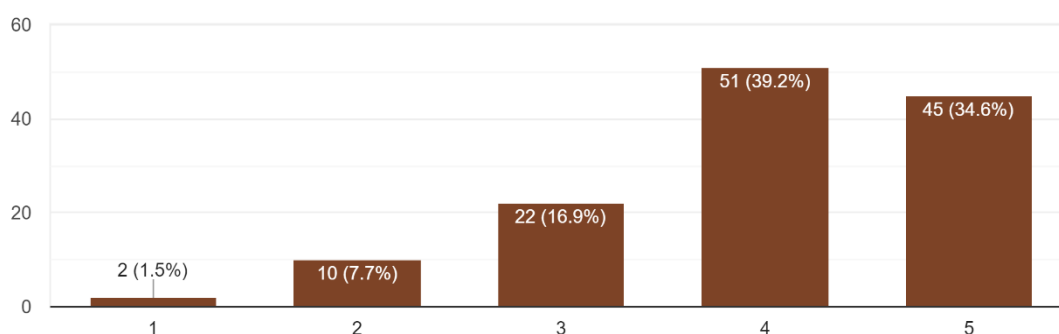


図 4-3 「イントロダクトリー科目」理解度（2018-2019 年度入学生）

図 4-3 は、現 1～2 年生の希望するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の理解度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の理解度は4と5を合わせると、73.8%の学生が「理解できている」と回答している。「理解できていない」1と2の回答者は、9.2%と1割以下にとどまっており、学生は「イントロダクトリー科目」を総じて理解しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する3の回答者が16.9%いるため、これらの学生層も理解度を高められるように点検する必要がある。

下記の図 4-4 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の理解度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の満足度は4と5を合わせると、69.8%と7割近い学生が「理解できている」と回答している。一方、「理解できていない」1と2の回答者はわずか6.18%にとどまっており、メジャー・専修に所属後の学生が「イントロダクトリー科目」を総じて理解していると判断できる。ただし、「どちらともいえない」に該当する3の回答者が24.2%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

あなたは、所属するメジャー・専修のイントロダク...きましたか。それとも理解できませんでしたか。
149 件の回答

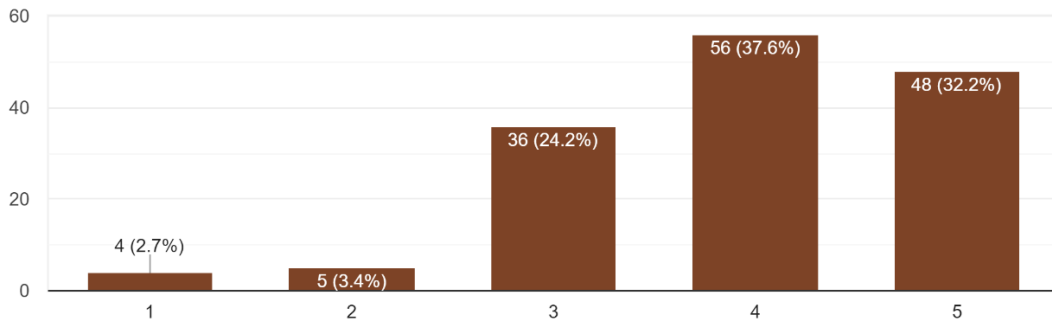


図 4-4 「イントロダクトリートリ科目」理解度（2017 年度以前入学生）

あなたは、希望するメジャー・専修のベーシック科目の授業に満足していますか。
130 件の回答

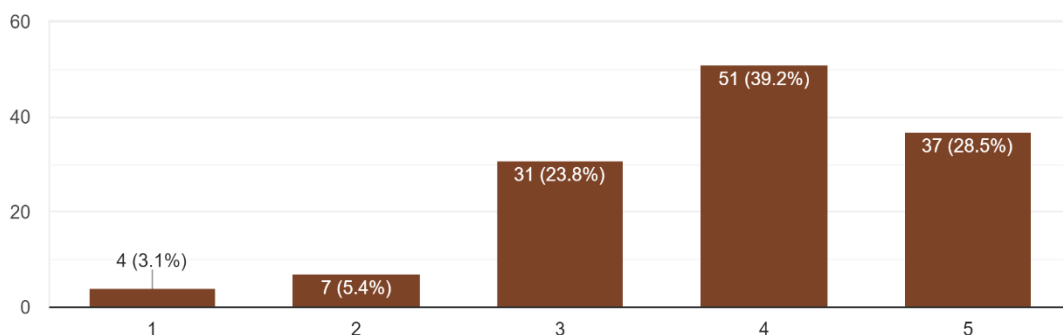


図 4-5 「ベーシック科目」満足度（2018-2019 年度入学生）

図 4-5 は、現 1~2 年生の「ベーシック科目」の満足度である。これをみると、「ベーシック科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、67.7%と 7 割近い学生が「満足している」と回答している。一方、「満足していない 1 と 2 の回答者は 8.5%と 1 割に満たない。この結果は、現 1~2 年生の「ベーシック科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 23.8%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

あなたは、所属するメジャー・専修のベーシック科目の授業に満足していますか。
149件の回答

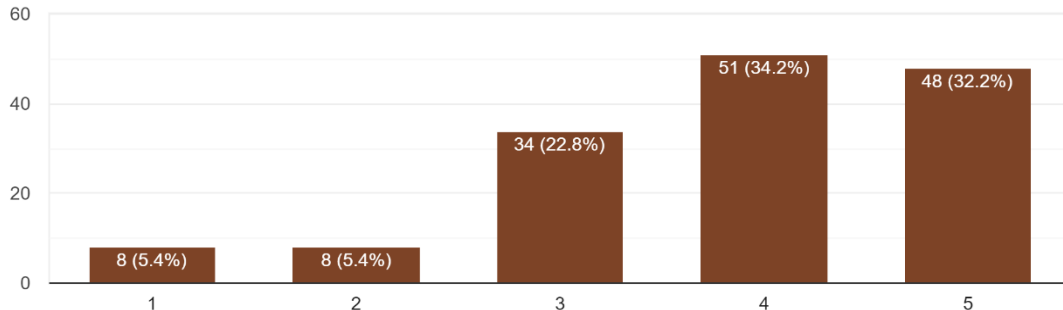


図 4-6 「ベーシック科目」満足度（2017 年度以前入学生）

図 4-6 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「ベーシック科目」の満足度である。これをみると、「ベーシック科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、66.4%の学生が満足していると回答している。一方、「満足していない 1 と 2 の回答者は 10.8%にとどまっており、メジャー・専修に所属後の学生に対しても「ベーシック科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 22.8%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

あなたは、希望するメジャー・専修のベーシック科...きましたか。それとも理解できませんでしたか。
130件の回答

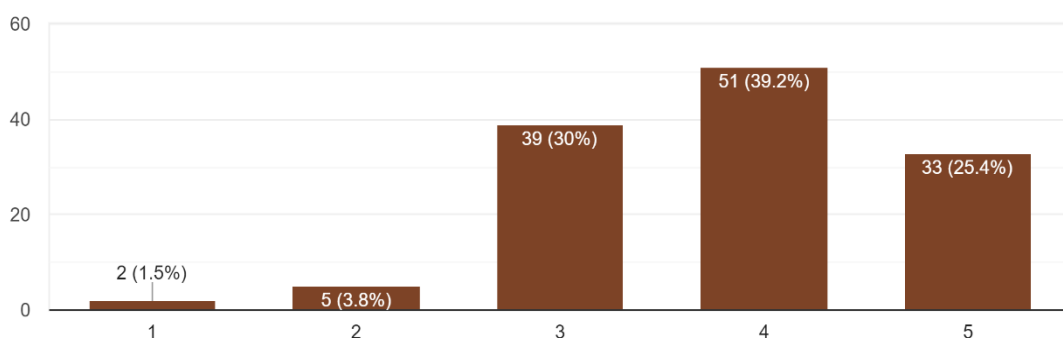


図 4-7 「ベーシック科目」理解度（2018-2019 年度入学生）

図 4-7 は、現 1～2 年生の「ベーシック科目」の理解度である。これをみると、「ベーシック科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、64.2%の学生が「理解できている」と回答し

ている。一方、「理解できていない」1と2の回答者は5.3%と1割に満たない。この結果から、現1～2年生は「ベーシック科目」を総じて理解できていると判断できる。ただし「どちらともいえない」に該当する3の回答者が30%いる。この学生層にも理解度を高められるように点検する必要がある。

あなたは、所属するメジャー・専修のベーシック科...きましたか。それとも理解できませんでしたか。
149件の回答

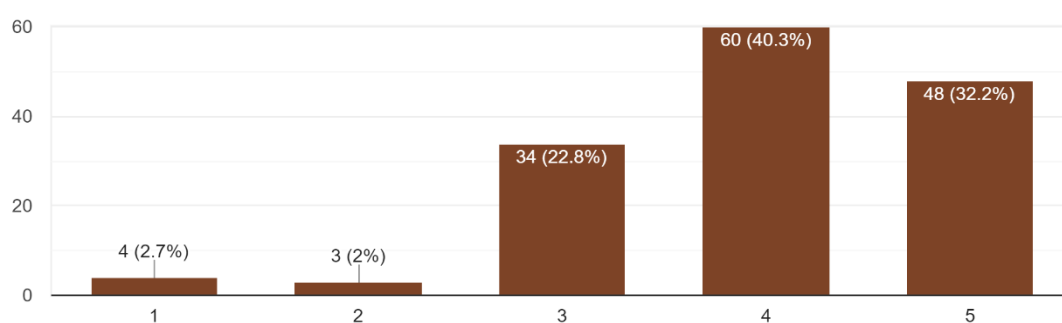


図 4-8 「ベーシック科目」理解度（2017年度以前入学生）

図 4-8 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「ベーシック科目」の理解度である。これをみると、「ベーシック科目」の理解度は4と5を合わせると、72.5%と7割を超える学生が「理解できている」と回答している。一方、「理解できていない1と2の回答者はわずか4.7%にとどまっている。この結果から、メジャー・専修所属後の学生も、「ベーシック科目」を総じて理解できているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する3の回答者が22.8%いるため、この学生層にも理解度を高められるように点検する必要がある。

下記の図 4-9 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「アドヴァンスト」の満足度である。これをみると、「ベーシック科目」の満足度は4と5を合わせると、62.4%の学生が満足していると回答している。一方、「満足していない1と2の回答者は10.8%にとどまっており、メジャー・専修所属後の学生に対して「アドヴァンスト科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する3の回答者が26.8%いるため、この学生層に対しても満足度を高められるように点検する必要がある。

あなたは、所属するメジャー・専修のアドバンスト科目の授業に満足していますか。

149 件の回答

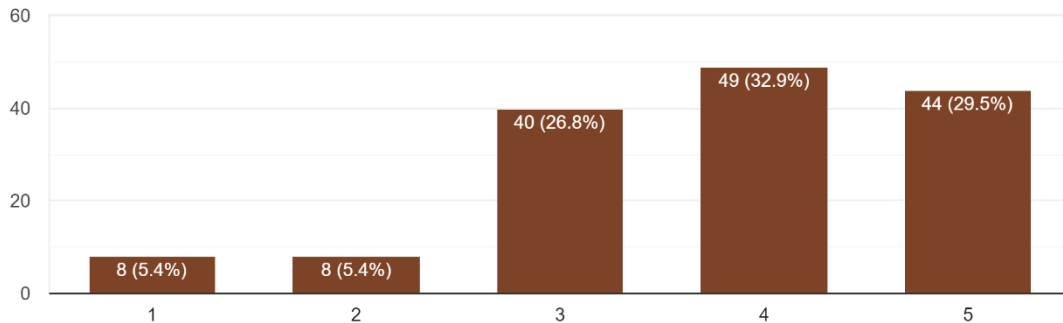


図 4-9 「アドバンスト科目」満足度（2017 年度以前入学者）

あなたは、所属するメジャー・専修のアドバンスト...きましたか。それとも理解できませんでしたか。

149 件の回答

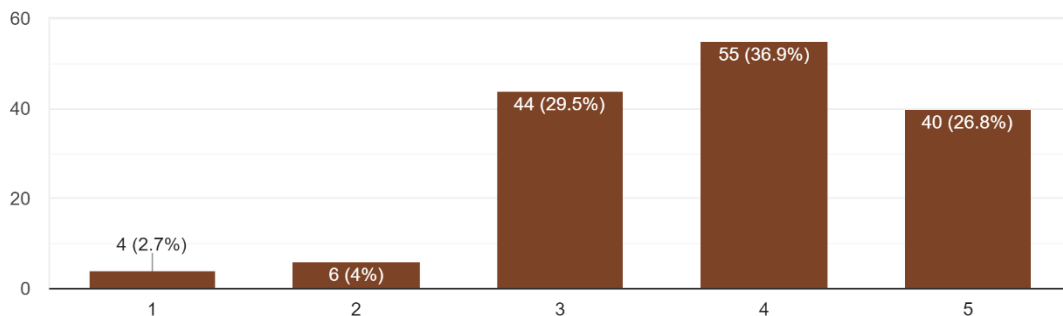


図 4-10 「アドバンスト科目」理解度（2017 年度以前入学者）

図 4-10 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「アドバンスト科目」の理解度である。これをみると、「アドバンスト科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、63.7% と 6 割を超える学生が「理解できている」と回答している。「ベーシック科目」と比べるとやや理解度が低下するが、「アドバンスト科目」という位置づけからみても、自然な結果ともいえる。また、「理解できていない 1 と 2 の回答者はわずか 6.7%にとどまっている。この結果から、メジャー・専修所属後の学生も、「アドバンスト科目」を総じて理解できているといえる。ただし「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 29.5%と 3 割いるため、この学生層にも理解度を高められるよう点検する必要がある。

(6) 専門教育と人間教育の拠点（「演習 I～IV」＜3・4年次必修＞）

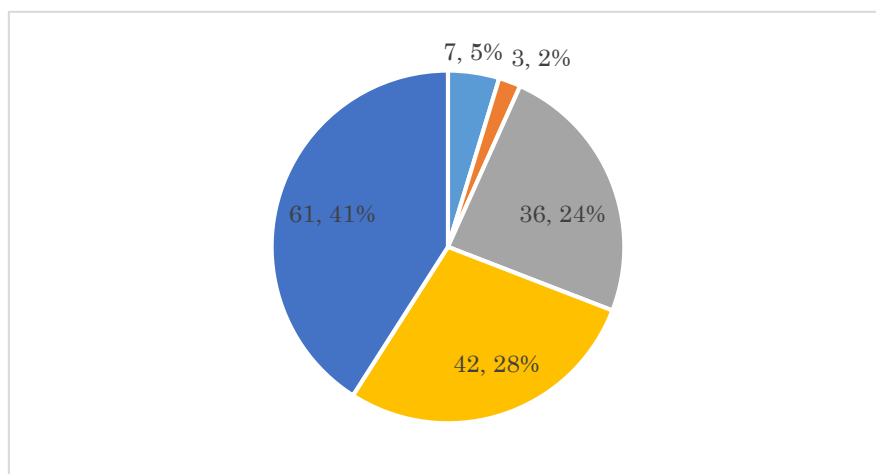


図5 演習（ゼミ）の満足度（2017年度以前入学者）

図5は現3年生以上の演習（ゼミ）の満足度である。同科目は、学生が満足度について言及しにくいため、他の項目より詳細に質問した。

同科目の満足度をみると、「とても満足」が41%、「満足」が28%で両者を合わせると69%と7割近い数値となった。また、「どちらともいえない」が24%、「満足していない」が2%、「まったく満足していない」が5%となった。これらの結果から、本科目に対する学生の満足度は総じて高いといえる。ただし、少数ながら7%の学生が「満足していない」現状をいかに打開するか、点検が必要となる。

(9) (10) 学部講義科目のアクティブ・ラーニング

あなたは、文学部の授業で実施されているアクティ...足していますか。それとも満足していませんか。
247件の回答

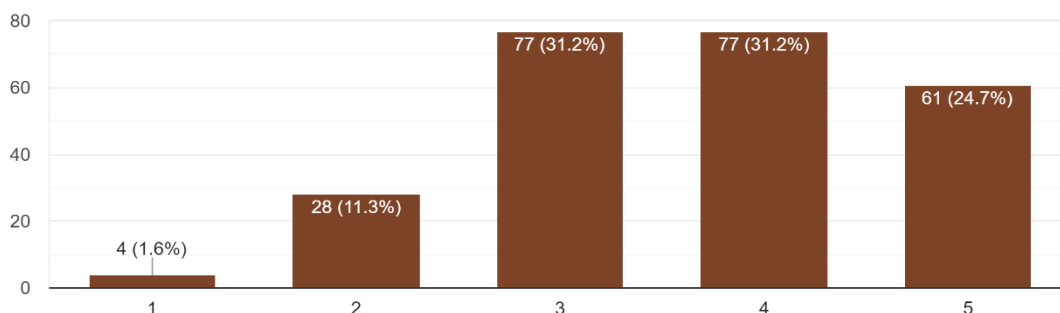


図6 アクティブ・ラーニングの満足度

図6は学部専門科目のアクティブ・ラーニングの満足度である。これをみると、アクティブ・ラーニングの満足度は4と5を合わせると、55.9%の学生が満足していると回答している。一方、「満足していない1と2の回答者は12.9%にとどまっており、アクティブ・ラーニングの満足度は総じて高いといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する3の回答者が31.2%いるため、この学生層に対しても満足度を高められるように点検する必要がある。

(11) カリキュラム・マップ

カリキュラム・マップは、本学部の各専門科目がどのメジャー・専修の科目であるのかだけでなく、ディプロマ・ポリシーに明示している7つのラーニング・アウトカムズのどの項目をねらいとする科目であるのかを、学生が一目で把握できるよう「履修要項」に示しているものである。特に新生生に対しては、大学全体の履修ガイダンスのほか各メジャー・専修の教員が担当して学部独自の履修相談会も行い、学生の理解に努めている。

なお、本アンケートでは、今後の発展方策のため、「希望するカリキュラム・授業」について、自由記述で回答を求めた。そこでの要望については、新カリキュラム策定の際、生かしていきたい。詳細は2. 点検・評価および3. 将来に向けた発展方策において記す。

B.各メジャー教員による自己点検のための分析から

各メジャー責任者がメジャー担当教員の意見・要望をまとめて現状を分析し、2019年12月に報告書を作成した。(根拠資料2)次にその内容を要約的に示して教員サイドからの現状の説明とする。

<哲学・歴史学メジャー>

哲学・歴史学メジャーは「西洋から東洋までの、そして古代から現代までの知の蓄積を継承しながら、新たな知を形成しゆく力を養う」ことを目標としている。そのためイントロダクトリー科目の「哲学・思想への招待」・「歴史学への招待」では、それぞれ西洋哲学と仏教思想、日本史・西洋史・東洋史の入門的内容をバランスよく取り扱うことで、初学者が広い視野から人文学を探究するための素地を身に着けられるようにしている。ベーシック科目では、西洋哲学・東洋哲学および日本史・東洋史・西洋史に関する科目を各2科目以上設け、それぞれの分野の基礎的内容を着実に学習できるようにしている。かつ、その中には仏教思想・倫理学・比較文化史・考古学など多様な学問分野の概論が含まれており、これらの科目を履修することにより学生が多角的な視点から哲学・歴史学を学べるようになっている。アドヴァンスト科目においても、西洋哲学・東洋哲学および日本史・東洋史・西洋史に関する科目を各2科目以上設け、かつその中に論理学・言語哲学・科学哲学・宗教学や民俗学・比較文化史(日本文化と外国文化との比較史)・古文書学・西洋文化史・東洋文化史・中央ユーラシア史など多様な分野の科目、またより専門性の高い講義を行う哲学・思想特

講・歴史学特講を置くことで、学生が自らの関心に基づいて様々な分野の専門的内容を学習できるようにしている。

このほか、哲学・歴史学メジャーの科目には、中学社会科および高等学校地理・歴史科の教職課程における「科及び教科の指導法に関する科目」が多く含まれている。その中では、歴史学分野の基幹科目である日本古代・中世史概説、日本近世・近現代史概説、西洋史概説Ⅰ・Ⅱ、東洋史概説Ⅰ・Ⅱを教職課程の必修科目に設定し、免許取得希望者に対して日本・西洋・東洋の古今の歴史を網羅的に理解させるようにしている。高等学校地理・歴史科の教職課では、日本史・外国史に関する科目を必修・選択あわせて20単位以上修得する必要があるが、哲学・歴史学メジャーにはこれらの分野に関して30単位分の科目が設けられており、社会科教員を養成するための教育体制は整っている。

哲学・歴史学メジャーは、2018年度の文学部新カリキュラム導入時において従来の哲学メジャーと歴史学メジャーを統合して設けられたもので、その際に学部学生の定員減や専任教員の減少および負担軽減のため、科目の統廃合をすすめ、科目数をそれまでの3分の2程度にまで縮減した。その結果、とくにアドヴァンスト科目が大幅に削減され、その結果後述するような課題も浮かび上がってきている。しかし、全体としては入門・基礎から専門的内容の科目を幅広く、かつバランスよく配置できており、かつ演習と卒業論文作成により各分野の専門的内容を学習できるようにしているため、本メジャーの理念・目標を達成するうえで適切な科目が設置されていると評価できる。また、メジャーの履修モデルにおいて、(1)哲学を中心に学ぶ、(2)歴史学を中心に学ぶ、(3)哲学と歴史学をともに学ぶ、という3パターンのモデルを提示し、学生が自らの関心に合わせて該当分野の学問を体系的に学べるしくみを整えている。なお(1)ではさらに西洋哲学・東洋哲学のどちらかを中心に学ぶためのモデル、(2)では日本史・西洋史・東洋史のいずれかを中心に学ぶためのモデルも提示し、専門性の高い内容を効果的に学ぶための体系性も整っているといえる。

<表現文化メジャー>

表現文化メジャーの目標は、次の通りである。「文学作品をはじめ映画・アニメ・舞台芸術など表現文化全般について、批評・分析の方法を学ぶとともに、創作にも挑戦していく。古今東西の芸術作品に触れながら、「本物」を見極める眼を養い、人間主義の思想を独創的に表現できる人材を輩出していく。特徴：①文学研究：作品を読み解くための研究法を学び、原語をふまえながら作品を読み味わう。②舞台芸術・映画研究：古代ギリシアから現代に至るさまざまな舞台芸術、また映像作品について批評・分析する。③文芸創作：創作の基本を習得し、創作活動の力を育成する」。

表現文化メジャーの科目構成は、イントロダクトリー4科目（うち選択必修2科目）、ベーシック72科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト54科目（うち必修6科目）であり、設置された科目は概ね適切で、体系性も確保されていると考えられる。

<異文化コミュニケーション（英語）メジャー>

異文化コミュニケーション英語メジャーの目標は、次の通りである。「①コミュニケーション

ン理論、②異文化理解、③第二言語取得理論と英語教育、④通訳、翻訳の4つの領域を総合的に学ぶことができる。ネイティブ・スピーカーが担当する授業を多く設置し、英語運用能力を高めつつ、各領域の専門知識を習得していく。世界を舞台に、多文化共生社会をリードする力を育む」。

異文化コミュニケーション英語メジャーの科目構成は、イントロダクトリー4科目（うち選択必修2科目）、ベーシック47科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト43科目（うち必修6科目）である。メジャー内の科目数やレベル間のバランスはよいが、英語DDプログラムの内容の変化に伴い、いくつかの課題が出ている。

＜異文化コミュニケーション（日本語）メジャー＞

異文化コミュニケーション日本語メジャーの目標は、次の通りである。「①日本語は、世界の人々から見たら一体どんな言語なのか、その面白さに迫る。②当メジャーは日本語教育科目が充実しており、日本語教師への道を開く。③留学生や帰国学生を積極的に受け入れ、異文化理解などコミュニケーション能力や多様性を受容する力を身につける。④日本語をさまざまな視点から考察することで、日本語コミュニケーション能力をさらに磨く。⑤世界の言語・文化の中における日本語、日本文化の特徴を見つめ、深めた知識や情報を世界に向けて発信する能力を養う」。

異文化コミュニケーション日本語メジャーの科目構成は、イントロダクトリー4科目（うち選択必修2科目）、ベーシック30科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト36科目（うち必修6科目）である。現状、レベル別にバランスよく適切に科目配置がなされており、国語科教員の輩出のためにはとくに問題はないと考える。この後、大学院に進学してさらに研鑽し、海外の大学で日本語教師になる者もいる。

＜異文化コミュニケーション（中国語）メジャー＞

異文化コミュニケーション中国語メジャーの目標は、次の通りである。「①世界で最も使用人口の多い中国語をマスターすることをめざす。②ネイティブ・スピーカーの教員が担当するコミュニケーションの授業で実践的な語学力を養成する。③在学4年間での学習カリキュラムで初級・中級・上級と段階的に学べ、各種検定資格試験にも対応する。④毎年10名が北京語言大学とのダブル・ディグリーコースによる2年間の留学で2大学の学位取得を可能とする」。

異文化コミュニケーション中国語メジャーの科目構成は、イントロダクトリー4科目（うち選択必修2科目）、ベーシック34科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト30科目（うち必修6科目）となっており、読み・書き・話す（聞くも含め）の総合的な能力を発展させることを目的とし、学年別に各教科を配置している。特に通訳演習（日中・中日）、翻訳演習（日中・中日）は語学習得の各スキルを総合的に発展させる内容で、少数人数クラス方式を用い教員と学生、学生と学生間の双方向授業を実施している。現状、バランスよく適切に科目配置がなされているが、いくつかの課題があり、点検・評価の項目で示す。

＜異文化コミュニケーション（ロシア語）メジャー＞

異文化コミュニケーションロシア語メジャーの目標は、次の通りである。「トルストイ、ドストエフスキー、チャイコフスキーを産んだ精神と芸術の大国ロシア。豊富な資源をもつロシアは、文化だけでなく貿易、産業、技術レベルで日本との交流がますます活発化し、経済界でもロシア語の需要が高まっている。本学は東西冷戦の時代にモスクワ大学と結んだ交流協定を基礎にして、日本有数のロシア語専門教育のカリキュラムを置いている。ネイティブ・スピーカーや同時通訳によるていねいな指導で、体系的なロシア語能力を養うとともに、文学をはじめ幅広い分野のテキスト読解にも挑戦する」。

異文化コミュニケーションロシア語メジャーの科目構成は、イントロダクトリー4科目（うち選択必修2科目）、ベーシック27科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト26科目（うち必修6科目）である。総じて、各レベルの科目数（及びコマ数）と内容の点に関する限りでは、現状、レベル別にバランスよく適切に科目配置がなされており、ロシア語とロシア文化の学修においてとくに問題はないと考える。しかし、いくつか課題がある。

＜国際日本学メジャー＞

国際日本学メジャーの目標は、次の通りである。「国際日本学メジャー」では、まず世界の中に日本を位置づけ、地理的・歴史的特徴をふまえながら、その変遷をたどる。そして、現代日本を的確かつグローバルに捉える座標軸を獲得しながら、今後の時代をいかに他の文化の人々とともに生きるべきか、自身に何が貢献できるか、日本の独自性をどこに見出すべきかについて、自身の関心の高いテーマを選び、幅広い観点から研究する。日本人・留学生を問わず、グローバルな視点を備えた真の日本理解者を育てたい」。

国際日本学メジャーの科目構成は、イントロダクトリー4科目（うち選択必修2科目）、ベーシック66科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト50科目（うち必修6科目）である。科目数やレベル間のバランスはよい。

＜社会学メジャー＞

社会学メジャーの目標は、次の通りである。「社会学」の視点から、現代社会のさまざまな現象を見ると、当たり前だと思っていたことが驚きを持って見直せたり、変だと思っていたことが理解可能なこととして見えてきたりする。この「社会学」の視点を通して、私たちの回りにある世界の「多様性」に気づき、さまざまな人間や社会についての「理解」が可能になる。そうした社会的なものを見方を、家族、地域、都市、宗教、労働、政治、社会心理、メディア、異文化などを題材にして学んでいく」。

社会学メジャーの科目構成は、5科目のイントロダクトリー科目（うち選択必修2科目）、41科目のベーシック科目（うち選択必修2科目）、40科目のアドバンスド科目（うち6科目は演習・卒業論文）であり、構成、比率ともに適切である。また、社会学の概論的科目、社会学方法論の科目も充実しており、日本だけでなく、国際的な視野を養える科目もあり、社会の多様性を洞察し、人権の世紀を築く人材を育成する社会学メジャーの目標に合致した科目設定となっている。

＜社会福祉専修＞

社会福祉専修の目標は、次の通り。「多様な人々の「協働」による社会をどのように実現させるかを、福祉の視点から学び、考えるのが社会福祉専修である。社会福祉専修では、社会福祉士という仕事を通して、未来への社会づくりを実践する人材の育成をめざす。このため、4年次で実施される社会福祉国家試験の受験資格が取得できるようなカリキュラムとした。可能であれば多くの人に社会福祉専修で学んでほしいが、受験資格取得のために20名という定員*がある。社会福祉専修で学んだ人の活躍の場としては、地方公務員や福祉事務所職員、ソーシャルワーカーなどを想定している」。（*本専修は定員20名で厚生労働省より社会福祉士国家試験受験資格の課程認定を受けている。）

社会福祉専修の科目構成は、イントロダクトリー3科目（うち選択必修2科目）、ベーシック16科目（うち選択必修2科目）、アドヴァンスト30科目（うち必修6科目）である。現状、社会福祉士国家試験を受験するために必要とされる科目がレベル別にバランスよく配置されており、同国家試験の受験資格を得るためにとくに問題はないが、課題と対応策を後に示す。

④ 学生の学修を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

学生の学修を活性化し、教育効果を上げるためには、教員各自が自らの授業を活性化する必要がある。学部としては大学全体として行なっている各種FD活動（セミナーや同僚会議）に学部教員が積極的に参加・発表するよう働きかけるとともに、学部FD予算による学内外のFD関連事業への教員参加や発表を促している。学部として毎年度末に「年3回以上のFD活動参加」を確認する参加状況一覧表を作成している。2019年度のFD参加状況を見ると、2月末時点で、3回以上29名、2回9名、1回10名、0回4名であった。3回に満たなかった者がいるが、それらは本年度は英語によるFDがなかったため出席しなかった外国人教員や体調不良で出席できなかった教員である。その他、授業公開、学部長・コーディネーターによるシラバス点検と指摘、（大学の学習支援室の資料を基に）良質なアクティブ・ラーニング授業の推進の取り組み等を行なっている。学生たちからの文学部の授業に対する反応は、前述の点検項目③のA.学生の満足度調査（9）（10）に見られる通りである。その結果、学生の予習・復習の授業外学修時間も着実に上昇していることが2019年度秋学期の授業アンケート結果（根拠資料3）からも確認できる。

また初年次セミナーにおいては、プロジェクト・アドベンチャーというクラスメンバーがまず最初に仲良くなる企画を導入して、友人を作り共に学修していけるようにしている。また同じく初年次セミナーでは、学生生活ポートフォリオと学修ポートフォリオのグループワークを全クラス行い、計画的な学修を促している。さらに、演習はもちろんのこと、講義科目においてもアクティブ・ラーニングの導入を積極的に推進しており、全学共通の各科目シラバスにも「アクティブ・ラーニングのあるなし」を明記している。なお、全学においてAL推進会議が設置され、そのもとに本学部においてもAL推進チームがつけられ、年に数

回の「同僚会議」や研修会を開催し、アクティブ・ラーニングの推進とその改善を目的とした取り組みを行なっている。本年度初めての取り組みであるが、いくつかのゼミで学生たちがポートフォリオその他を基に4年間を振り返り、「学びの集大成」(根拠資料4)という学修報告をスライドで作成し発表した。その中から学修の活性化に関する学生の率直な感想を若干抜粋する。

(例)

- ・グループワークのある授業が多く、その中で状況分析、情報収集力、計画性、積極性、グループ討議力を身につけることができた。
- ・物事に取り組む際、目標をたて、それに沿った計画を立てて行うようになった。
- ・他者と関わる際、しっかり自分の主張を伝えられるようになった。グループ学習など初対面の人と物事に取り組む際は、早く打ち解けられるように、自己紹介では共通点を探したり、少し変わった挨拶の仕方を作ったりと、打ち解けるきっかけを探すようになった。
- ・一人の力はそんなに大きくないかもしれないが、良くも悪くも周りの力をかりると大きくすることができる。
- ・たくさんのことを経験することができ、大切な人がたくさん増え、学びづくりの4年間だったと思います。変化に弱く、面倒くさがりで、自己管理もろくにできないわたしでしたが、ここまで成長することができました。それもこれも全て私と関わり、支えてくれた方々のおかげで、本当に感謝の気持ちしかありません。
- ・大学の授業を通して、日本語とドイツ語を伸ばし、日本語能力試験N1と独検2級にも挑戦し、最終的に合格を達成した。論文のアカデミック・スキルを身に着け、時間管理ができ、計画通りに論文を完成できた。
- ・『人間学』という授業で学んだ「生命の尊厳」や『創立の精神を学ぶ』を学ぶことによって、自分を見つめ、創造的世界市民としての課題に取り組む。
 - ・ 勉学、活動、アルバイトなどで「両立」をすることによって、社会人にとって重要なスキルの一つとしての時間管理を教えてくれた。
 - ・ 1年生の時、日本語能力試験一級を受け、いい点数が取れなかったが、3年生の時、再挑戦して140点以上(159点)が取れて、最初に苦手な日本語能力が着実に伸びたと思う。
 - ・ 人の前に日本語で話すのが苦手だったが、ゼミを通して日本語でプレゼンテーションをしたり、アルバイトで日本語を使ったりすることによって、自分の恐れることに挑戦することができた。
 - ・ 「学術文章」という授業で学んだことを生かし、日本語で卒業論文を書くことができた。

上記の例はごく一部であるが、これらからは、いずれもアクティブ・ラーニングを通して振り返りや計画的な学習の習慣が身につく、4年間で自分を客観視できる自立的学習者とし

で成長したことがうかがえる。3人目の学生は留学生であり、創価大学の日本語別科（最長1年間の学部入学準備コース）で初めて日本語を学んだのにもかかわらず、上記のように流暢に日本語を使いこなすようになったのである。

今後とも、自立的学習者を輩出できる教育を行うべく、学部としてさらに改善に取り組んでいく。

⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

学部としてディプロマ・ポリシーを定めて履修要項等に明記するとともに、各ラーニングアウトカムズごとに成績評価のためのルーブリックも示している（根拠資料 5） Los ルーブリック資料)。さらに大学全体で定めている 13 段階の成績評価基準にしたがって成績評価と単位認定を行っており、この評価基準が適用されない演習や卒業論文については独自の評価ルーブリックを策定し、適切に成績評価が行なわれているが（根拠資料 6）※②演習・卒業論文ルーブリック資料)、一層の適切性の確保に向けて、成績評価に関する教務部資料等の客観的なデータをもとに、学部教務委員会、学部教授会で点検していく。

⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

学習成果の把握については、定期試験、各種レポート、毎回の予習・復習課題、授業アンケート、教員によっては独自の学生アンケート等によって把握し評価しているが、学部として教員を対象とした独自のアンケートを実施した。アンケート結果は次の通りである。

1) アンケートの概要

2019年11月に文学部教員に対して「ディプロマ・ポリシーと授業評価に関する教員アンケート」を実施した。本アンケートは、簡易ではあるが文学部の2019年度自己点検評価実施計画の⑥項目「学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか」に対する自己点検のために実施したものである。本アンケートには、2019年度に授業を担当した46名中42名から回答があり、回収率は91.3%であった。以下、結果をまとめる。

2) 質問項目

本アンケートでは春・秋学期の担当授業（おもに講義科目）で、①成績評価がディプロマポリシー（以下、DP）に準拠しているか、②成績評価基準がシラバスに表記されているか、③学習成果の基準は何かの3点を質問した。また、教員の授業負担を推し量るため、担当している講義科目のうち春・秋学期それぞれの最多履修者の科目名と履修者数も質問している。

3) 結果の概要

3) -1 成績評価と DP 準拠

はじめに、成績評価が DP に準拠しているかをみてみたい。図 1-1 は春学期の調査結果

である。これをみると、97.6%（41名）の教員がDPにもとづいて成績評価を行っていると回答していることがわかる。そのほかでは「どちらともいえない」と回答している教員がわずか2.4%（1名）であり、「いいえ」は皆無であった。また、図1-2で示した秋学期の結果も97.6%が同じように回答しており、「どちらともいえない」がわずか2.4%（1名）であり、「いいえ」は皆無であった

以上から、ほぼすべての文学部教員が、成績評価をDPにもとづいて行っていると意識していることが明らかとなった。

成績評価は、ディプロマポリシーにもとづいて適切に行なわれていますか。

42件の回答

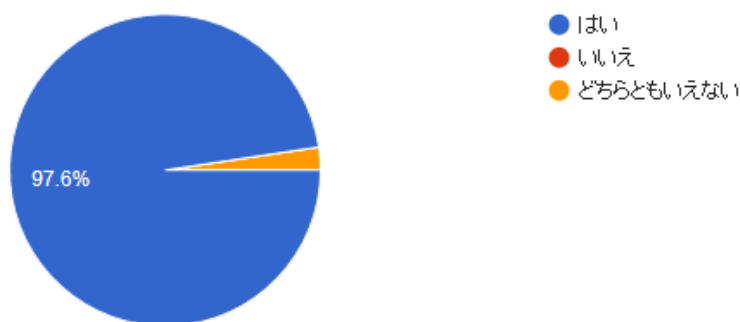


図1-1 成績評価とDP準拠（春学期）

成績評価は、ディプロマポリシーにもとづいて適切に行なわれていますか。

42件の回答

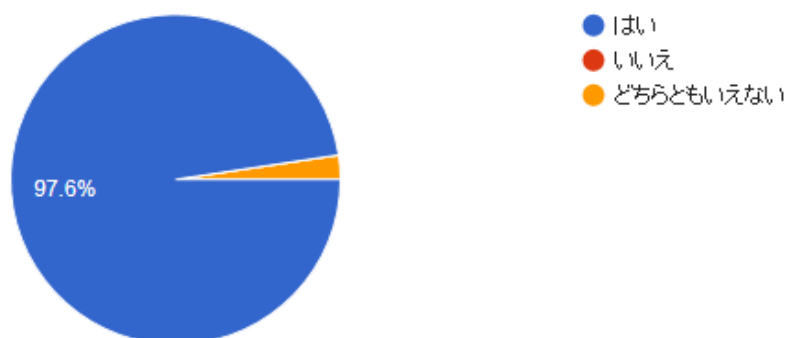


図1-2 成績評価とDP準拠（秋学期）

3) -2. 成績評価とシラバス表記

次に、成績評価がシラバスに記載されているかどうかを確認する。図 2-1 は春学期の調査結果である。これをみると、97.6%（41 名）の教員が成績評価基準をシラバスに記載していると回答していることがわかる。そのほかでは「どちらともいえない」と回答している教員がわずか 2.4%（1 名）であり、「いいえ」は皆無であった。

また、図 2-2 で示した秋学期の結果も 97.6%が同じように、成績評価基準をシラバスに記載していると回答しており、「どちらともいえない」がわずか 2.4%（1 名）であり、「いいえ」は皆無であった

以上から、ほぼすべての文学部教員が、成績評価基準をシラバスに記載していると意識していることが明らかとなった。

成績評価の基準は、シラバスに明記されていますか。

42 件の回答

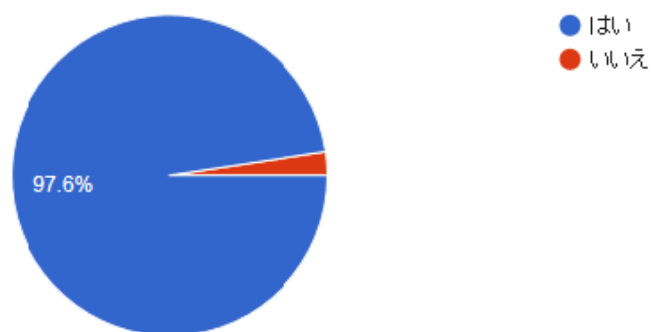


図 2-1 成績評価基準とシラバス表記（春学期）

成績評価の基準は、シラバスに明記されていますか。

42 件の回答

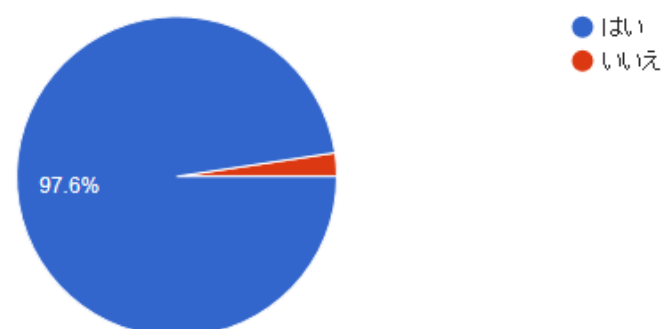


図 2-2 成績評価基準とシラバス表記（秋学期）

3) -3. 学習成果の基準

続いて、学習成果を何によって評価しているかをみてみよう。回答は複数回答を可としている。春学期（図 3-1）・秋学期（図 3-2）とも共通して多いものから列举すると、「各種レポート」、「定期試験」、「毎回の予習・復習課題」、「小テスト」の順となっている。学習成果の評価基準が、定期試験よりも各種レポートの方が多くなっていることが目を引く。

また、「その他」についても春学期で 16.7%（7 名）、秋学期で 26.2%（11 名）となっている。これらは、文学部生の多様性を評価する文学部教員の教育の志向性・指導性の特徴のあらわれといえるだろう。

学生の学習成果は、具体的には何を基準にして測定していますか。あてはまるものすべてを回答してください。

42 件の回答

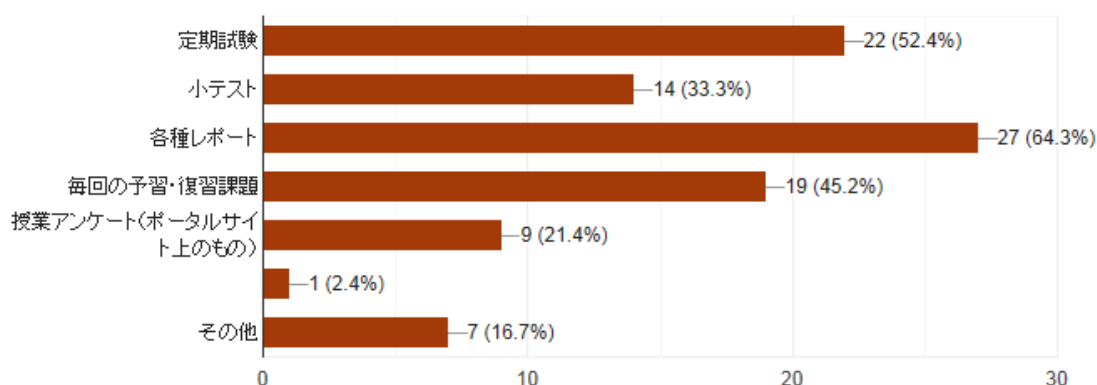


図 3-1 学習成果の基準（春学期）

学生の学習成果は、具体的には何を基準にして測定していますか。あてはまるものすべてを回答してください。

42 件の回答

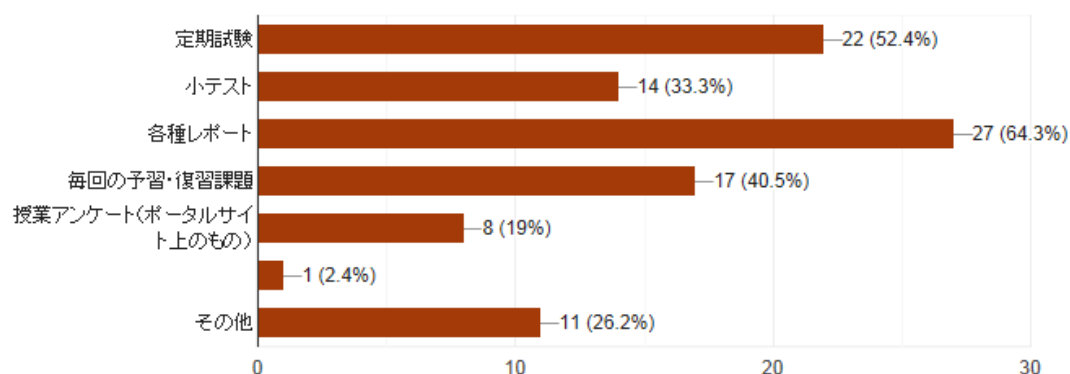


図 3-2 学習成果の基準（秋学期）

3) -4. 担当授業の最多履修者数と分布

さらに、文学部教員の担当授業の最多履修者とその分布をみてみよう。表 1 は春学期、表 2 は秋学期の結果である。春学期の最小履修者数は 12 名、最大履修者数は 315 名となった。秋学期でも、5 名と 273 名と春学期と同じように大きな開きがあった。教員間の最多履修者数の分布をみるため、図 4-1 に春学期、図 4-2 に秋学期の最多履修者担当授業の分布状況を示した。

最多履修者の中央値、平均値、標準偏差を春学期・秋学期の順で列挙すると、中央値 49.5 人・53.0 人、平均履修者 78.3 人・80.3 人、標準偏差は 76.1 人・70.0 人となった。

表 1 春学期・最多履修者の担当授業

Global Japan Studies	12
ドイツ文学入門	14
相談援助の理論と方法Ⅲ	15
作家作品論D	16
日本史Ⅰ	19
東洋史概説Ⅰ	19
英語科教育法Ⅲ	20
倫理学概論	21
ロシア語Ⅰ	21
中国語Ⅰ	21
ロシアの社会	22
中・古期英語史と文化	24
社会調査方法論	28
中国語文法初中級Ⅰ	30
日本語学概論Ⅰ	34
「イギリス古典文学史」	36
中東地域研究	36
宗教学	39
比較 国際教育学 A	46
文学研究法入門 1	46
比較国際教育学 A	49
共通科目国際関係	50
国際関係論	50
サブカルチャー論	52
社会学 国際関係	57
東アジアの経済	64
社会福祉入門	73
*現代文明論	74
西洋文化史	78
英文法研究Ⅰ	78
英語翻訳入門Ⅰ	100
*国際日本学への招待	107

*国際日本学への招待	107
社会言語学	117
*現代社会研究への招待	142
Reading: Literary Works I (英米文学入門 I/ 英米文学講読 I)	156
文化人類学	158
比較文化史概論	215
*異文化コミュニケーション	228
*異文化コミュニケーション	228
演劇入門	272
文学部の学びとライフデザイン	315

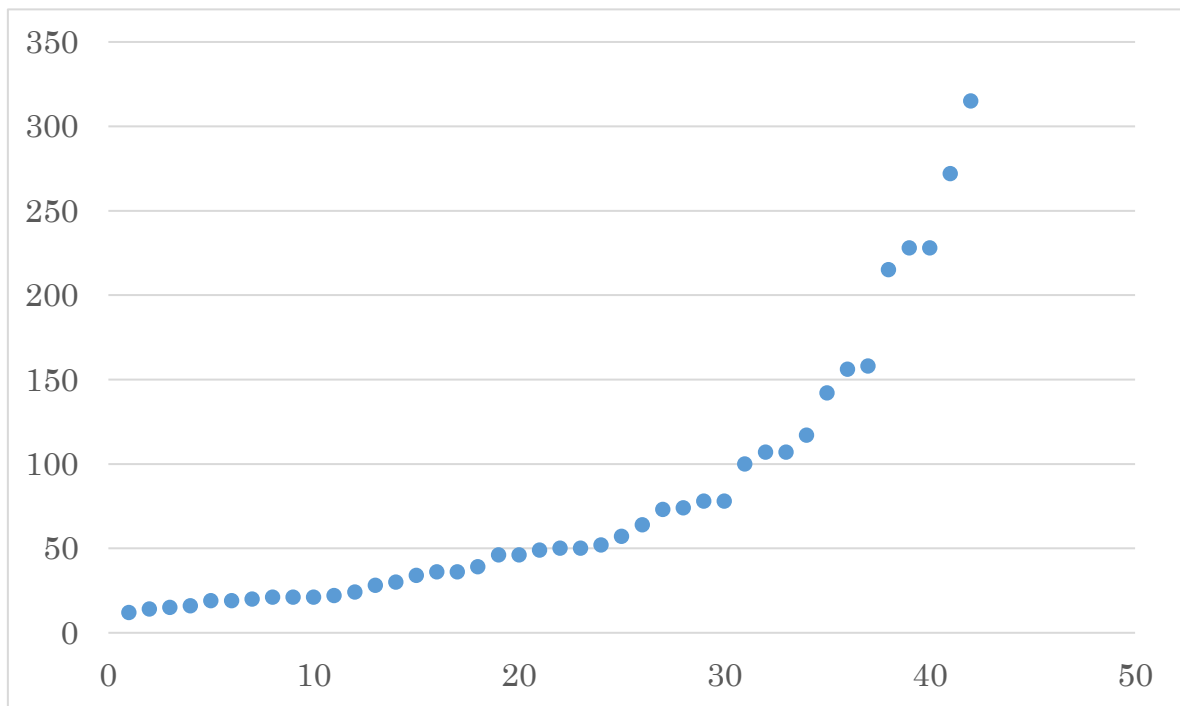
*印はオムニバス授業。

表 2 秋学期・最多履修者の担当授業

ドイツ文学特講	5
東洋史概説Ⅱ	14
翻訳演習 B	19
翻訳演習(日中)B	19
第二言語習得論	20
倫理学概論	21
Human and Society 1	22
ロシアの文学	23
中国語コミュニケーション演習初級Ⅱ	23
社会福祉概論Ⅱ	25
低所得者における支援と生活保護制度	26
ロシア語Ⅱ	26
平和学	28
中東地域研究	38
共通基礎演習	40
ロシア・ユーラシア経済論	45
仏教思想概論	45
近代英語史と文化	46
イギリス近代文学史	49
言語哲学	49
共通科目国際関係	50
*歴史学概論	56
共通科目 国際関係	57
日本文学概論	59
英文法研究Ⅱ	63
比較文化史	71
日本近世・近現代史概説	81
共通総合演習 B	84
教育の社会学	84
言語文化論入門／言語文化への招待	98
英語翻訳入門Ⅱ	100
地域研究：中国研究	117

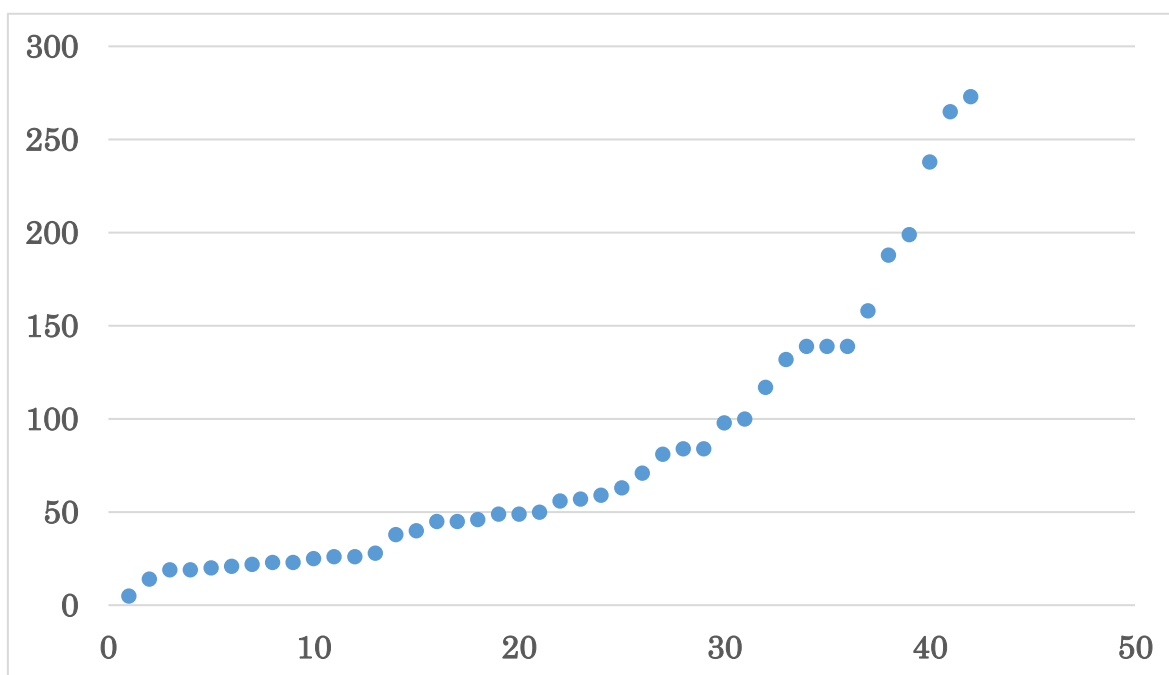
日本文学史	132
*異文化コミュニケーション	139
*異文化コミュニケーション	139
*英米文学概論	139
文化人類学	158
メディアと社会心理	188
*表現文化論入門	199
社会で通用する日本語	238
*国際交流と日本社会	265
社会学概論	273

*印はオムニバス授業。



中央値 49.5 人 平均履修者 78.3 人、標準偏差 76.1 人

図 4-1 春学期履修者数の分布（縦軸は履修者数・横軸は教員のべ人数）



中央値 53.0 人 平均履修者は 80.3 人、標準偏差 70.0 人

図 4-2 秋学期履修者数の分布（縦軸は履修者数・横軸は教員のべ人数）

本データには、複数のオムニバス授業がふくまれている。同授業は、履修者が多くなる傾向にあり、一教員が全 15 回の授業を担当する科目と単純に比較はできない。しかし、最多履修者の中央値が 50 人程度、平均が 80 人程度であるのに対して、標準偏差が 70 人を超えているのは、担当する最多履修者数からみて、教員間の授業負担の差が著しいことを示唆するものである。したがって、今後の教員の授業負担については、課題や定期試験の評価負担を考慮し、担当科目数だけでなく、履修者の多寡にも着目する必要があると判断できる。

⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

教育課程及びその内容、方法の適切性について現在学部としては 5～6 年ごとのカリキュラム改定の前年に学部カリキュラム検討委員会を中心に検証を行なっている。またその結果にもとづいた改善・向上への取り組みは新カリキュラムとして反映させている。しかし、今後はもう少し短い期間での定期的な検証にもとづいて必要な改善への取り組みを行なうためにカリキュラム検討委員会を常設化したい。

なお、本年度も教育課程及びその内容、方法の適切性を 7 つのアセスメント項目（＝7 つのラーニング・アウトカムズ項目※①）について現状分析を行った。扱った 28 のアセスメント科目は、9 つのメジャー・専修の基幹科目であり、それらをカリキュラム・マップ（※②）にしたがって 7 つのアセスメント項目別に分け、過去 3 年間の成績の推移とそれらの科目の授業アンケートにおける「到達目標」の達成度の推移を点検・評価することとした。

なお、過去3年間の成績の推移についてはB評価以上の推移を中心に点検した。理由は、シラバスの「到達目標」の達成と成績評価の関連について全学共通に「現実的かつチャレンジングな目標」としてB評価以上を「到達目標」の「達成」としていること、およびB以上にあたるS評価とA評価については成績評価の厳格化の観点から、原則として両評価の合計を履修者の30%以内とするキャップ制を採用しているからである。また授業アンケートを用いることについては、教員からみた客観的評価と学生から見た主観的評価の比較に一定の意味があると考えからである。これらの点検によって、2つの推移の原因を探り、学部としての今後の授業改善につなげたいと考えるからである。なお、担当教員の交代その他の理由により、今回アセスメントできなかつた科目には▼をつけた。

その他、中国語等の第2外国語の語学能力試験の成果による言語能力の伸長度の測定と分析（TOEICのスコアの伸長度の測定と傾向分析は昨年度に行った）や各種免許・資格の取得状況に基づく学修成果の達成状況を分析した。海外研修参加者・留学学生へのアンケートと分析も昨年度に行ったので本年度は行わなかつた。本年度、アセスメントできなかつた項目には▼をつけた。

以上のアセスメント・ポリシーと実行計画を一覧にすると以下のとおりである。

<ラーニングアウトカムズ アセスメントプラン>

アセスメント項目	アセスメント指標	★アセスメント対応科目(パイロット科目)
(1)人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。	履修科目の到達度(成績)★ 卒業論文の完成度(4年次)▼ 教員採用試験(社会・地歴・公民)の合格者数	文学研究法入門I▼、英米文学概論I 社会学概論、歴史学概論、社会福祉入門 日本語学概論I 東洋文化史I▼
(2)母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。	語学系履修科目の到達度(成績)★ TOEIC等のスコア▼、中国語等の第2外国語語学能力試験 教授試験の合格者数(英語・国語)	Oral Communication in English I 日本語教育概論I 中国社会文化論I Academic Writing A I
(3)基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。	履修科目の到達度(成績)★ 卒業論文の完成度(4年次)▼	日本文学概論I、英語学概論I、演劇論 日本文学史、社会福祉概論I
(4)論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。	履修科目の到達度(成績)★ 就業力判定テスト(1年次後期・3年次後期・4年次後期)▼	ジャーナリズムの社会学I、論理学I 社会調査の基礎、メディアと社会心理I

(5)文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。	履修科目★ 海外研修参加者・留学学生へのアンケート(研修終了後、留学からの復学時)▼	比較文化Ⅰ、倫理学概論Ⅰ、国際社会論 東欧の歴史と文化、比較文化史概論
(6)学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。	初年次セミナーの到達度(学び始めルーブリック・リフレクションシート)▼ 文学部の学びとライフデザインの到達度(アンケート)▼	
(7)人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。	履修科目到達度★ 人間学の到達度(授業アンケート当該項目)▼ 初年次セミナー到達度(学び始めルーブリック・リフレクションシート)▼ 文学部の学びとライフデザイン到達度▼ 社会福祉士国家試験合格者数	平和学、ジェンダーの社会学、児童福祉論Ⅰ 人間の安全保障

次に各アセスメント項目ごとの現状について説明する。

①アセスメント項目(1)

<人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。>

○アセスメント指標1：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目とした5科目では、B 評価以上の達成率が6～8割とばらついている。特に6割となった「日本語学概論Ⅰ」は漸減の傾向が見られる。担当者の自己点検のためのコメントでは「日常点として課している毎回の授業振り返りレポートを提出できていないことが大きい」とあり、さらなる改善が求められる。ただし、全体が6割以上であることを勘案すると、対応科目全体としては、概ね十分な教育と適正な評価がなされていると考える。過去3年間(春学期は2017～2019、秋学期は2016～2018の数字)で極端に下がった科目はない。

科目名	年度	B 以上	履修者数	科目名	年度	B 以上	履修者数
英米文学概論Ⅰ	2017	83.9%	193	社会学概論	2016	39.5%	38
	2018	87.1%	140		2017	76.7%	60
	2019	86.8%	144		2018	79.1%	110
社会福祉入門	2017	74.5%	55	歴史学概論	2016	51.9%	52

	2018	86.4%	59		2017	73.3%	30
	2019	86.1%	36		2018	75.6%	123
日本語学概論 I	2017	83.3%	36				
	2018	78.8%	33				
	2019	60.6%	33				

(成績に関する教務部資料より作成)

《科目の自己点検評価の例》(資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より)

「英米文学概論 I」

①履修者の成績の推移と教授法の関係について

2019年度生については評価基準が変更になりましたので、今回は扱わず2017年度および2018年度生までについてB評価の増減をみていきたいと思います。2017年度はB評価48%、A評価31%、S評価5%、SとAの合計は38%でした。2018年度はB評価54%、A評価27%、S評価6%、SとAの合計は33%でした。SとA評価の減については、評価基準を厳格にとの考慮が反映されています。またB評価は48%から54%と増加しています。これは期末レポートに加えて日常課題レポートをより増やすことで点数を積み上げていける結果になったものと考えられます。

②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度

授業の到達目標の達成度の推移についてですが、2017年度は14.1%の履修者が90%以上達成、43.8%が80%~89%以上達成、34.4%が70%~79%達成、7.8%が60%~69%達成、0%が60%未満達成と答えました。2018年度は、19.8%の履修者が90%以上達成、36.0%が80%~89%以上達成、29.1%が70%~79%達成、10.5%が60%~69%達成、4.7%が60%未満達成と答えました。2019年度は、20.9%の履修者が90%以上達成、44.2%が80%~89%以上達成、27.9%が70%~79%達成、4.7%が60%~69%達成、2.3%が60%未満達成と答えました。90%以上達成との回答が、14.1%~19.8%~20.9%と増加していますが、期末レポートに加え、日常課題の設定を増やしたことが達成度を高めたと考えられます。またプレゼンテーションの奨励も達成度を押し上げる要因となっていると考えられます。また90%以上と80%~89%以上達成の回答を合計した数字においても、2018年度は55.8%であったものの、2017年度の57.9%に対して2019年度は65.1%で上昇傾向にあることが示されています。

「社会学概論」

●B評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2016~2018年のB評価の増減は、順に32%、53%、49%で推移している。毎回の授業後に提出を求めた履修者のリアクションペーパーの内容から、「人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる」能力についてその到達度を判断してきたが、一定程度以上同項目を達成できていると考えられる。

○アセスメント指標2：教員採用試験（社会・地歴・公民）の合格者数

社会・地歴・公民の教員採用試験は難関であり、人間と社会と文化に関する幅広い基礎的教養と深い専門性が求められる。この試験の合格者数はアセスメント項目（1）の点検に資すると思え、アセスメント指標とした。

まず、毎年の途中取り消しを除いた4年次段階の文学部教職課程登録数は30～40名程度で、教採受験者数は約20名、現役合格数は8～9名である。過去3年（2017年度、2018年度、2019年度）の合格者数の推移は英語、国語、社会（または地歴・公民）を合わせて、17名（現役8、卒業生9）→22名（現9、卒13）→21名（現9、卒12）である。教員採用は地方を中心に臨時教員経験者を合格させる傾向にあるが、文学部も毎年、ほぼ半数が卒業生である。そのうち、社会（または地歴・公民）は1名（卒1）→5名（現2、卒3）→1名（卒1）となっている。

学部の取り組みとしては、5年前から教職志望者のための大会を年2回開催し、第1回（7月）は現任教員の本学部卒業生を招いて教育現場の仕事内容やアドバイスをお願いし、第2回（11月）は教採合格者の体験・活動報告や質問会を行い、どちらの回も教職キャリアアセンダー職員によるアドバイスを行なうなどして志望者をサポートしている。

教採合格者の声として、教採受験生が懇談したり自習できる部屋が中央教育棟にあると有難いということであった。

②アセスメント項目(2)

＜母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる＞

○アセスメント指標1：語学系履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目とした4科目では、B評価以上の達成率が9割近いものがあるものの、5割台のものもあり、教育成果にばらつきが見られる。5割台の「中国社会文化論Ⅰ」は改善が求められる。なお、Oral CommunicationⅠのB以上評価が9割前後であるのは、3クラスに分けて少人数教育を行い、教育効果が出ているためと考えられる。昨年大きく下がった「日本語教育概論Ⅰ」については、履修者数が多いことが原因とも思われるが、2019年度は回復した。履修者の増減にかかわらず十分な教育がなされることが望ましい。

科目名	年度	B以上	履修者数	科目名	年度	B以上	履修者数
Oral CommunicationⅠ	2017	86.9%	99	中国社会文化論Ⅰ	2017	77.3%	44
	2018	93.0%	100		2018	76.5%	34
	2019	87.0%	69		2019	54.2%	24
日本語教育概論Ⅰ	2017	85.0%	20	Academic WritingⅠ	2017	87.3%	71
	2018	66.7%	51		2018	77.3%	66
	2019	87.5%	24		2019	69.0%	71

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「Oral Communication I」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

This year brought two essential changes:

- Rather than depending largely on the textbook for lesson content, I had students begin some lessons with 10 or 15 minutes of free conversation in groups, often on the topic of their out-of-class activities, with a view to increasing their fluency.
- I have increased the range of YouTube videos available to students, also cutting the time per video to encourage participation. These inform the students regarding grammatical forms, meanings and accurate uses that they should use in class.

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント(授業改善との関係など)

According to the students' responses over the last three years, their level of satisfaction regarding their achievements versus the stated course objectives has been above average compared to the department and the university in general, particularly this year, 2019, when their response has been very positive.

Comparing this year's responses with those of the previous two years we see the following:

2017: 3.81

2018: 3.71

2019: 4.11

There was no significant difference in results between 2017 and 2018, but a clear jump in 2019. The only real change this past year that may have had an impact was the introduction of the free conversations, since the use of the additional video homework started from 2017. However, the videos have been improved and extended in number, somewhat. Perhaps the two have contributed to this change. One other point that may be significant, however, is that the class of 2019 was significantly smaller in number, meaning that each student was able to receive a greater degree of personal attention.

③その他

Next year will bring three changes:

- The same textbook will be used for both the first and second semesters, thus raising the difficulty level for Oral Communication 1
- There will be more non-textbook work involving both free conversations and the recounting of personal stories and experiences. The latter will require careful homework preparation, adding the opportunity to consider grammatical points before actually talking in groups. This should help increase the quality of the spoken English.
- More videos are available as lesson support, particularly in the area of pragmatics, and students will need to access these in order to perform well in class. There is also a channel "map" available

that may help navigate the videos available.

(要約: 教員は授業の始めに、学生たちに身近に起こった出来事を自由に語らせてアイスブレイキングを行ったり、毎回学生たちに見ておくように指定しておいて YouTube について語らせる反転授業を行うなど工夫をしながら、教科書に取り組んだ。毎年、さまざまな理由により各クラスの受講人数に増減はあるが、20人(2017年)→19人(2018年)→9人(2019年)と人数が減ったクラスにおいて成績 B 以上は相変わらず 75%以上であり、授業アンケートの満足度は、3.81(2017年)→3.71(2018年)→4.11(2019年)と推移している。「英会話」の授業においては、少人数であるほうが学生は力をつける(=教育効果が上がる)といえる。)

「Academic Writing I」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B 評価の数は、2017年 8 件、2018年 4 件、2019年 6 件です。この科目は、授業内容の特性から、クラス定員を 20 名程度としており、1-4 年生が履修します。B 評価が 2018 年に減っているのは、学生の取り組みが全体的によく、A 評価の数が増えたことが理由に挙げられます。少人数制で、学生一人一人に細かな対応ができるため、学生の課題などの取り組みもよい傾向にあります。2019 年度より、新評価方法となり、A-評価以上の%制限がありますので、今後、より厳しい評価方法が必要であると考えています。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント(授業改善との関係など)

授業の到達目標の達成度の数値は、2017年 4.00、2018年 4.05、2019年 4.11 と上がっています。このことは、授業の目的と、この授業で何ができるようになることがねらいか、学生が明確にしながら、課題などに取り組んだからではないかと思えます。

「中国社会文化論 I」

●B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2017 年の 32%から 2018 年の 26%に減少しているが、A 評価が 27%から 32%へと増加している。中国からの留学生が多く受講しており、また教材が中国語なのでグループ学習の際に留学生を中心に中国語の発音練習を取り入れたことで、履修者総体の学習意欲向上が見られた。また、事前学習の励行を徹底したことも履修者の能力向上に結び付いており、こうしたことが B 評価から A 評価への成績向上につながったと考えられる。今後は学習成果の定着のために事後学習の取り組み強化工夫していきたい。

○アセスメント指標 2 : 教員採用試験(英語・国語)の合格者数

文学部全体の合格者数の推移は前のアセスメント項目(1)で示した通りで、過去 3 年(2017 年度、2018 年度、2019 年度)においては、17 名(現役 8、卒業生 9)→22 名(現 9、卒 13)→21 名(現 9、卒 12)という状況である。ここにも先に触れた学部の教職生大会の効果が出ているものとする。そのうち、英語は→11 名(現 5、卒 6)→9 名(現 8、卒 1)→11 名(現 4、卒 7)となっている。国語の合格者数は過去 3 年において、4 名(現

1、卒3)→6名(現1、卒5)→5名(現4、卒1)となっている。英語は1年おきに現役と卒業生の合格者数が増減している。国語は毎年、現役合格の数が増えてきている。

先にも(アセスメント項目(1))でも述べたが、教採合格者の声として、教採受験生が懇談したり自習できる部屋が中央教育棟にあると有難いということであった。

○アセスメント指標3：第2外国語のスコア

英語以外の外国語で基準点(本学シュリーマン賞受賞レベル=TOEIC730レベル)を達成した文学部生(以下、第2外国語基準点達成者)の語学力について、2016年度(47名)と2017年度(23名)のデータをもとに分析する。手元にあるデータは、学年、入学時スコア(以下、初回点)、在学時の最高点(以下、最高点)、受験回数のみである。

本来は、留学先、留学期間、出身高校の偏差値、入試種別、GPAスコア、メジャー、教職課程の履修有無、日本学生支援機構の奨学金貸与の有無・種別・貸与総額のほか、本学学生の独自性の指標であるクラブ・サークル活動の諸データ(日・週・月の活動時間・執行担当の有無)など、質をふくめたデータを分析に加味する必要がある。今回は、きわめて簡易的になるが、初回点、最高点、初回点と最高点から計算可能な上昇点、受験回数に限定した分析を行なう。

1. 全体の傾向

1-1. 2016年度

表1：2016年度 文学部生全体のTOEICスコア(606名)

	初回点	最高点	上昇点	受験回数
平均値	398.70	520.98	122.28	3.95
中央値	375.00	485.00	100.00	3.00
標準偏差	127.37	178.46	115.87	2.85
最小値	160.00	165.00	0	1.00
最大値	940.00	960.00	600	20.00

表1は2016年度における学部生全体606名、表2は第2外国語基準点達成者47名が取得したそれぞれのTOEICの初回点、最高点、上昇点、受験回数を、平均値、中央値、標準偏差、最小値、最大値で集計したものである。

文学部生全体の平均値をみると、初回点398.70、最高点520.98、上昇点122.28、受験回数3.95回となっている。中央値をみると、初回点375、最高点485、上昇点100、受験回数3となっており、平均値をそれぞれ23.7、35.98、22.28、0.95下回っており、少数のスコア高得点者が全体の平均値を底上げしていることがわかる。標準偏差は、初回点127.37、最高点178.46、上昇点115.87、受験回数2.85であり、学生間の差が顕著といえる。学生間の差をもっともよくあらわしているのは、初回点と最高点にみる最小値と最大

値の差である。初回点は、最小値 160 に対して最大値は 940 でその差は 780、同じく最高点では最小値 165 に対して最大値 960 とその差は 795 となっている。

表2：2016年度 第2外国語基準点達成者のTOEICスコア（47名）

	初回点	最高点	上昇点	受験回数
平均値	413.61	546.91	133.29	4.65
中央値	395.00	540.00	110.00	4.00
標準偏差	129.48	156.137	106.087	2.98
最小値	220.00	245.00	0	1.00
最大値	885.00	895.00	380.00	16.00

表2は、第2外国語基準点達成者のTOEICスコアである。平均をみると、初回点413.61、最高点546.91、上昇点133.29、受験回数4.65となっており、学部生全体と比べると、それぞれ、14.91、25.93、11.01高くなっている。

中央値でみると、初回点395、最高点540、上昇点110、受験回数4となっており、平均値をそれぞれ18.61、6.91、23.29、0.65下回っており、文学部生全体と比べると、得点の散らばりが縮小していることがわかる。

初回点と最高点にみる最小値と最大値の差でも、同じ傾向がみてとれる。初回点は、最小値220に対して最大値は885でその差は665、同じく最高点では最小値245に対して最大値895とその差は650となっている。これを学部全体と比較すると、初回点で115、最高点で145も差が縮小していることがわかる。

以上から、第2外国語基準点達成者は、学部全体と比べてTOEICにおいても高い成績を残し、かつ、同集団内での学生のスコアの差が縮小する傾向にあるといえる。

1-2. 2017年度

表3：2017年度 文学部生全体のTOEICスコア（623名）

	初回点	最高点	上昇点	受験回数
平均値	373.94	487.52	113.58	3.46
中央値	350.00	450.00	80.00	3.00
標準偏差	141.12	192.24	119.72	2.52
最小値	0	0	0	1.00
最大値	945.00	955.00	535.00	18.00

表3は2017年度における学部生全体623名、表4は第2外国語基準点達成者23名が取得したそれぞれのTOEICの初回点、最高点、上昇点、受験回数を、平均値、中央値、標準偏差、最小値、最大値で集計したものである。

文学部生全体の平均値をみると、初回点 373.94、最高点 487.52、上昇点 113.58、受験回数 3.46 回となっている。中央値でみると、初回点 350、最高点 450、上昇点 80、受験回数 3 となった。平均値をそれぞれ 23.94、37.52、33.58、0.46 下回っており、少数のスコア高得点者が全体の平均値を底上げしていることがわかる。

標準偏差は、初回点 141.12、最高点 192.24、上昇点 119.72、受験回数 2.52 であり、2016 年度以上に学生間の差が顕著となった。初回点と最高点にみる最小値と最大値の差では、初回点は、最小値 0 対して最大値は 945 で差は 945、最高点では最小値 0 に対して最大値 955 とその差は 955 となっている。

初回点・最高点の最小値・最大値が 0 となることは、通常の受験では考えにくい。TOEIC を受験したが無回答で答案を提出したか、氏名などのマークミス以外は考えられない点数である。厳密には英語力というよりはほかの問題と思われるが、入手したデータでみるしかない。最小値で 0 点の学生は、初回点・最高点とも 7 名いた。0 点以外の最小値は 160 点で、初回点で 2 名、最高点で 1 名である。

表4：2017年度 第2外国語基準点達成者のTOEICスコア（23名）

	初回点	最高点	上昇点	受験回数
平均値	470.43	572.61	102.17	3.52
中央値	410.00	540.00	110.00	4.00
標準偏差	192.808	184.673	98.475	1.880
最小値	315.00	325.00	0	1.00
最大値	945.00	945.00	330.00	8.00

表 4 は、第 2 外国語基準点達成者の TOEIC スコアである。平均をみると、初回点 470.43、最高点 572.61、上昇点 102.17、受験回数 3.52 となっており、2016 年度と比べると、初回点で 56.82、最高点で 25.7 高くなっている。ただし、上昇点は 31.2、受験回数は 1.13 低くなっている。

2017 年度の学部生全体と比べて高くなっているのは、初回点 96.49、最高点 85.09、受験回数 0.06 である。一方、上昇点では 11.14 低くなった。

中央値でみると、初回点 410、最高点 540、上昇点 110、受験回数 4 となっており、平均値と比べると、初回点で 60.43、最高点で 32.61 低くなった。これに対して、上昇点では 7.83、受験回数では 0.48 高くなっており、2016 年度と比べると、第 2 外国語基準点達成者のなかで初回点と最高点で差が開いたことがうかがえる。初回点と最高点の最小値・最大値・標準偏差の値はこのことを示している。

以上から、第 2 外国語基準点達成者は、2016 年度と同じく学部全体と比べて TOEIC においても高い成績を残しているといえる。

最後に、受験回数と上昇点の関連をみてみよう。2016年度は、文学部全体では1%水準で有意 (V=.375)、第2外国語基準点達成者では5%水準で有意 (V=.521) であった。2017年度でも、文学部全体では1%水準で有意 (V=.389)、第2外国語基準点達成者では5%水準で有意 (V=.521) であった。

2016年度、2017年度、いずれも、TOEICの受験回数がスコアに反映されているとみてよいだろう。

言語別の状況

第2外国語基準点達成者の初回点を言語別にみると、中国語と他言語の差が顕著である。表5は2016年度の中国語とその他外国語の学生のTOEIC初回点を表したものである。これをみると、中国語の学生のTOEICの初回点は他の外国語とくらべると低得点者が多い。注目すべきは、TOEIC初回点で295点以下、または、300-395点の低得点層にいた61.1%の学生が、中国語では基準点を達成しているという事実である。

表5 中国語とその他外国語のTOEIC初回点 (2016年度)

	>295	300-395	400-495	500-595	600-695	800-895	計
	8	14	10	2	2	0	36
中国語	22.2%	38.9%	27.8%	5.6%	5.6%	0.0%	100.0%
	0	2	4	2	2	1	11
その他	0.0%	18.2%	36.4%	18.2%	18.2%	9.1%	100.0%
	8	16	14	4	4	1	47
計	17.0%	34.0%	29.8%	8.5%	8.5%	2.1%	100.0%

V=.465 p<0.1

表6に示した2017年度のデータでも傾向は変わらない。初回点で295点以下の学生は中国語、他の外国語ともに皆無であったが、中国語では、TOEIC初回点で395点以下の低得点層にいる学生が50.0%と半分を占めている。

これらのデータは、入学時にTOEICで高得点を獲得できなくても、努力次第で中国語で基準点を達成できることを示している。換言すれば、たとえ英語学習に興味関心がなくても、中国語で外国語学習の成果を示せるといえる。このことは、多様な背景をもつ学生が存在する文学部にとっては1つの光明といえる。

表6 中国語とその他外国語のTOEIC初回点 (2016年度)

300-395	400-495	500-595	600-695	700-695	800-895	900<	計
---------	---------	---------	---------	---------	---------	------	---

	7	3	2	0	1	1	0	14
中国語	50.0%	21.4%	14.3%	0.0%	7.1%	7.1%	0.0%	100.0%
	1	4	1	1	0	0	2	9
その他	11.1%	44.4%	11.1%	11.1%	0.0%	0.0%	22.2	100.0%
	8	7	3	1	1	1	2	23
計	17.0%	34.0%	29.8%	8.5%	8.5%	8.5%	2.1%	100.0%

V=.637 NS

③アセスメント項目(3)

＜基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。＞

○アセスメント指標1：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）とした5科目では、B評価以上の達成率6～8割台であり、6割台の科目にはさらなる改善が求められる。「社会福祉概論I」と「日本文学概論I」は改善傾向にある。「英語学概論I」は履修者が半減し、それに伴ってかB以上も一昨年レベルにまで落ちた。その点についての担当科目者による自己点検が促される。なお、「日本文学概論I」と「日本文学史」は2019年度から担当者が変更になった。

科目名	年度	B以上	履修者数	科目名	年度	B以上	履修者数
英語学概論 I	2017	65.3%	144	日本文学概論 I	2016	49.1%	53
	2018	82.5%	114		2017	55.0%	60
	2019	65.0%	60		2018	60.4%	48
社会福祉概 論I	2017	58.1%	43	日本文学史	2016	67.7%	31
	2018	75.0%	32		2017	68.5%	54
	2019	86.1%	36		2018	72.4%	29
				演劇論	2016	84.5%	148
					2017	81.0%	179
					2018	78.7%	202

(成績に関する教務部資料より作成)

《科目の自己点検評価の例》(資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より)

「英語学概論I」

①B評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2017年度はB評価の割合が33%であったが、2018年度は53%となり、20ポイントの大きな増加となった。授業改善の取り組みとしては、学生が理解しやすいように教える内容を

吟味したことにあると思われる。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

2017年から2018年にかけて、90%以上理解できたという学生は10.9%から17.8%に増えおり、80-89%を理解したとする学生は23.6%から37.8%の増加となっている。英語学の難しい内容の部分よりわかりやすい内容に変えた結果だと思われる。

「演劇論」

●B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

レポート提出に加え、授業内では確認テストなどを行い、授業内での理解促進に取り組んできた。知的興味に加え、新しい知識スキルが身に付いた点は良かったが、授業の予習、復習にかかる時間が短いので今後の改善点として考えたい。

④アセスメント項目(4)

<論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。>

○アセスメント指標1：語学系履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度
対応科目（パイロット）におけるB評価以上の達成率とその推移は科目ごとで異なるが、およそ5～6割りで推移しており、さらなる改善が求められる。Bレベルに到達できない理由（履修者の学力差など）をよく検討し、達成度の向上をはかりたい。

科目名	年度	B 以上	履修者数	科目名	年度	B 以上	履修者数
ジャーナリズム の社会学 I	2016	52%	27	社会調査の基礎	2016	62%	72
	2017	63%	24		2017	43%	37
	2018	55%	22		2018	76%	61
メディアと社会 心理 I	2016	63%	98	論理学 I	2017	73%	25
	2017	61%	115		2018	62%	32
	2018	67%	144		2019	61%	31

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「社会調査の基礎」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B 評価の割合は、2017年度に29.7%、2018年度に21.7%、2019年度に32.3%となっている。年度による増減は、2018年度はクラブなどでまとまって履修する学生が多くC・D評価の割合が多くなったためと思われる。2019年度は評価方式が変わり、2年生以上を対象とした評価であり、社会的な思考に慣れた学生の割合が多くなったため、B評価が多くなったことも考えられる。

S 評価と A 評価とを合わせた割合はキャップ制の上限内に収まっているが、2017年に26%、2018年に30%、2019年度に27%となっており、B 評価と合わせた割合は、増加傾向にあると思

われる。下欄の②で述べたような理由で授業内容の大幅な変更は困難であるが、授業内容を厳選、整理して、受講生の理解しやすい内容への改善を続けたい。

授業の到達度は、平均で 2015 年度が 2.44、2017 年度が 2.74、2018 年度が 2.85 とまだまだ低い水準であるが、徐々に改善されている。最頻値をみると、2015 年度が「2」、2017 年度が「3」、2018 年度が「4」である。

「社会調査の基礎」の到達度をみると、受講者の理解レベルに応じた授業内容の見直し求められると思われる。しかしながら、授業内容については2つの制約を受けている。ひとつは本科目が「社会福祉士」国家試験の指定科目であるため、国家試験の出題範囲と出題レベルに対応した授業をする必要があること。もうひとつは、同時に本科目が社会調査協会による「社会調査士」認定の科目であり、授業内容について毎年認定を受けていることである。

このため、それぞれで求められる授業内容に留意しながらより高い到達目標を達成できるような授業改善に努めたい。

「論理学 I」

●B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2017 年度では平均 2.9 だったのに対して、2018 年には平均 3.74 になっているので、小テストを実施し、宿題の量を増やしたことが成績改善につながったと考えられる。引き続き、要所で小テストを実施し、知識の定着を確認するようにしており、それが反映されていると思われる。

⑤アセスメント項目(5)

<文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。>

○アセスメント指標 1：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）における B 評価以上の達成率は、大半が 8 割を超えており、概ね適切な教育と適正な評価がされていると考えられる。ただし、「論理学概論 I」が 5 割台（15 名中 8 名）と低い。その理由については、担当者のコメントにあるように、内容の大幅変更や履修者の大幅減などがあり、にわかには判定しがたい。授業は、第三者を入れるなどの工夫がなされており、今後の改善が見込まれる。

科目名	年度	B 以上	履修者数	科目名	年度	B 以上	履修者数
比較文化 I	2017	87.0%	141	比較文化史概論	2017	-	-
	2018	94.0%	186		2018	83.0%	223
	2019	85.9%	99		2019	79.5%	215
論理学概論 I	2017	73.0%	45	東欧の歴史と文化	2016	84.0%	98
	2018	62.0%	42		2017	88.0%	58
	2019	53.3%	15		2018	85.0%	107
国際社会論	2016	92.0%	12				

	2017	71.0%	24
	2019	86.4%	22

(成績に関する教務部資料より作成)

《科目の自己点検評価の例》(「担当科目自己点検のためのコメント」より)

「比較文化Ⅰ」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B 評価は、2017 年度は 57%であったのに対して、2018 年度は 64%となった。7 ポイントの上昇であった。授業内容については特に改善した点はないが、試験問題の難易が影響しているものと思われる。2018 年度の定期試験問題が前年よりも易しかったためである。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント(授業改善との関係など)

授業内容の理解度が 80%以上である学生の割合は、2017 年度が 69.6%で、2018 年度は 71.1%でほとんど変化がない。ただ理解度は 79%以下である学生が3割近くいるので、この学生たちの理解度を上げる必要があるので、次年度はその対策を検討して実施したい。

「倫理学概論Ⅰ」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

3 年間の B 評価の増減 36%→31%→27%は、他の増減と比べると、D 評価4%→12%→13%、C 評価 16%→21%→33%、A 評価 29%→17%→27%、S 評価9%→14%→0%であるから、相対的に C と A が増えていることを勘案すると、B は減少傾向にあるといえるかもしれない。ただし、従来 B に属した層の移行先が C であるか A であるかは、にわかに判定しがたい。判定しがたい理由は、①本科目が従来の「倫理学概論Ⅰ」「倫理学概論Ⅱ」の合併科目であり内容に大幅な変更があったこと、②今年度の履修者数が例年に比べて約半数であったこと、の二点である。なお、授業改善の工夫としては、Pass の授業観察等による第三者の助言を取り入れつつ、ディスカッションで多様な意見を拾うことと、授業内容の理解とが両立するように心がけてきた。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント(授業改善との関係など)

「あなたはシラバスに書いてある到達目標をどの程度達成できましたか」といいますか」の項目の数値(%)の推移としては、3「70～79%」を選択した割合が 33%→49%→33%、4「80～89%」を選択した割合が 49%→11%→47%、5「90%以上」を選択した割合が 10%→16%→13%であり、全体的に見ると、3は減少、4が増加、5が微減傾向にあるといえる。ただし、今年度の履修者数が例年に比べて約半数であるため、あくまで大まかな傾向と言うべきかもしれない。なお、授業改善の取組としては、Pass の授業観察等により第三者の助言を取り入れつつ、ディスカッションで多様な意見を拾うこと、授業内容の理解とが両立するように心がけてきた。

③その他

今年度は教材の選定を少し変えるなど工夫をしたが、今後とも教材の再検討を含め、教材の理解が履修者にまんべんなく行き渡る工夫を続けていきたい。

「国際社会論」

●B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

国際社会論の 17 年度 B 評価は、25%。18 年度は 38%であった。19 年度は 68%と向上している。当該科目の授業効果に関しては講義 PDF の事前配布が課題となってきた。今回は定期試験直前に講義 PDF を配布することで、講義中の履修者によるノート作製と正確な講義情報の配布という相反する目的には、一定の学習効果があったと言えるだろう。また以前は課題であった「面白いけれども理解が困難」という回答が見られなくなったことも PDF の配布が影響している様に思われる。

講義で PDF を配布すると講義中のノート取りが丁重になり、配布しないとノートは取ってくれるが講義の理解度が低下するという矛盾を回避するために定期試験の直前に講義 PDF を配布する方法は、授業アンケートの「教員・講師の話をよく聞く・ノートをとる」が、17 年度の 83.3%・66.7%、18 年度の 100%・66.7%、19 年度 83.3%・83.3%と増加していることから、「ノートを取る」と PDF の配布が良い効果を上げるようになったと思われる。

○アセスメント指標2：海外研修参加者・留学学生へのアンケート(研修終了後、留学からの復学時) 今回はアセスメントを行わなかった。

⑥アセスメント項目(6)

＜学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。＞

○アセスメント指標1:初年次セミナーの到達度(学び始めルーブリック・リフレクションシート)

○アセスメント指標2:文学部の学びとライフデザインの到達度(アンケート)

アセスメント指標は上記のとおりであるが、指標1については、学部全体の資料が入手できず、後者は2019年度開講でありデータが少ないため、どちらも分析ができなかった。次回から分析を行う。

⑦アセスメント項目(7)

＜人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。＞

○アセスメント指標1：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目(パイロット)におけるB評価以上の達成率は7割を超え、概ね適切な教育と適正な評価が行なわれているといえる。100%のケースもあるが、これは履修者数が20名を下回る科目で特に教育効果があったためと考えられる。

科目名	年度	B 以上	履修者数	科目名	年度	B 以上	履修者数
平和学	2016	100.0%	21	児童福祉論 I	2016	67.0%	54
	2017	74.0%	19		2017	39.0%	44
	2018	75.0%	4		2018	60.0%	48

ジェンダーの 社会学	2016	77.0%	96	人間の安全保障	2016	100.0%	16
	2017	77.0%	117		2017	100.0%	28
	2018	73.0%	136		2018	95.0%	20

(成績に関する教務部資料より作成)

《科目の自己点検評価の例》(資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より)

「人間の安全保障」

①履修者の成績の推移と教授法の関係について

20人規模のクラスのため1-2名の増減がパーセンテージとして大きくでている。履修者の学力は年度ごとに異なるので、授業内容もさることながら、履修者の学力レベルの違いが反映されやすい。そのため、履修者の対応力を見極めながら授業進度を調整してきたが、今後もそのように努めていきたい。

②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度

達成度の自己評価とB以上の成績評価との乖離はないと思われる。履修者の状況に合わせた指導を心がけたい。

「児童福祉論Ⅰ」

●B評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2017年度～2019年度までのB評価は、30%前後となっており、一定の水準で推移している。一定の質は確保していると思われるが、B評価が特に増加しているわけではない。授業では、児童福祉に関する映像視聴や最新の出来事を交えながら、学生が具体的なイメージをもてるようにしたり、リアクションペーパーへの記入と他の学生との共有を通じて、学生が授業で考えたことをアウトプットし、他者の意見を取り入れたりできるようにしている。しかし、居眠りをしていたり、内職をしている学生もいるため、90分の授業を通して、学生が主体的に自分で考えながら学べるような工夫をしていくことが、B評価の増加につながるのではないと思われる。授業の到達目標達成度が下がってきているため、学生の理解度を確認しながら、授業を進めていく必要がある。また、適切に予習課題を出すことによって、授業で学ぶことを少しでも理解できるようにしていきたい。

「ジェンダーの社会学」

●B評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B評価は、2016年が44%、2017年が38%、2018年が35%と減少傾向だが、A評価が27%、28%、38%と増加していることと考えると、むしろ高評価の履修者が増えているといえる。履修者の関心を高めるためDVD等の映像の使用、ディスカッションなどを取り入れているが、その成果の一端が表れていると思われる。

授業の到達目標の達成度については、2016年が3.85、2017年が3.65、2018年が4.04となっている。2017年度の数値が下がっていたので、理解しやすい授業内容を心掛け、関連DVDの鑑賞を増やし、ディスカッションの時間を多くとるといった改善の成果と考えられる。

到達目標など、大学平均は上回っているが、さらなる到達度向上のため、LDBTQの問題などジェンダー問題に関心をもつ学生に応えることのできる内容および授業方法の改善を進めていきたい。

○アセスメント指標2：社会福祉士国家試験合格者数

社会福祉専修の学生は過去5年間、社会福祉士国家試験に挑戦している。過去3年間の推移は以下の通りである。

	受験者数	合格者数	合格率
2017年度	20人	12人	60.0%
2018年度	18人	13人	72.2%
2019年度	10人	6人	60.0%

社会福祉士は、専門的知識及び技術をもって、身体上もしくは精神上の障害がある者、又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供したり、医師その他の保健医療サービスを提供する者や関係者との連絡及び調整その他の援助を行ったりする専門職である。まさに、人間主義に基づく思いやり（人間愛）と多くの専門家との協力、そしてリーダーシップを必要とする仕事であり、社会福祉士国家試験は、そのために必要とされる知識及び技能が身についたかどうかを試す試験であることから、アセスメント指標とした。

多少の増減はあるものの、この3年間は合格率70%前後（全国平均は約25%）で推移しており、全国でもトップレベルである。高い合格率は、3年半の学習（合宿を含む）や体験実習、模擬試験を通し、上記の能力が確実に培われていることを示している。これは社会福祉士国家試験の勉強に学生が専念できる体制の構築に努めているからである。毎年10月～12月に社会福祉士国家試験対策講座を実施し、国家試験科目である19科目すべての整理と重要ポイントの把握を、3か月間かけて集中して行っている。また5月～7月に1～2回の模擬試験を実施し、実力確認と本試験に向けての学習計画を立てて、早期に受験を意識できるようにしている。10月～1月には、月1回のペースで模擬試験を実施し、各自の実力の確認、弱点の発見と克服、次回の模擬試験に向けての目標の設定をし、本試験に向けて計画的に受験勉強が進められるようにしている。さらに、12月末の社会福祉士国家試験対策講座終了後には、2泊3日の勉強合宿を行い、同じ志をもった学生とともに切磋琢磨し合格を目指し、これまでの学習の整理と、勉強のリズムを維持できるようにしている。模擬試験の結果をみて、学生にはアドバイスをしているが、一人ひとりにあったきめ細かな学習支援を早

期にいかにつくっていくかということと、既卒受験生への対応をどのようにしていくかが課題である。

最後にこれまでその現状について説明してきたラーニング・アウトカムズ測定・評価のためのアセスメント・ポリシーの適切性を定期的に検証しているかであるが、この点は2018年度に策定したアセスメント・ポリシーによる測定・評価は今回が2回目であり、この後述べる点検評価の効果と改善すべき事項にしたがって、できるだけ多くの学部専門科目で、4年ごとを目安に定期的実施し、その適切性を検証していく予定である。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

①学生満足度調査でも示されたように、本学部のメジャー制の体制は高い割合で学生に支持されている。学生が履修する際のいわば敷居の低い専門分野を配置するメジャー制は、他学部に比べて多様な学問分野を含む本学部において、学生が広く学ぶことと深く専門的に学ぶことの両方を達成するために設けた体制であり、学生はその趣旨を良く理解して履修し、学修に取り組んでいる。そのことは、各科目の単位取得状況、成績の分布とその変化、本学が設けている成績顕彰制度であるシュリーマン賞やダヴィンチ賞、また社会福祉士国家試験等において、本学部の学生が優れた成績をおさめていることから分かる。今後も基本的にメジャー制を維持していく方針である。

(2) 改善すべき事項

①カリキュラム・ポリシーの(1)～(10)に関する学生の満足度アンケートから言えることは、どの項目においてもほぼ60～70%の学生が満足しているということと、多くの項目において20～30%の学生が「どちらともいえない」と答えており、学部としてカリキュラム設計上のさらなる工夫が必要である。(11)に関連して新科目の開設も含め、カリキュラム改定に向けて検討する必要がある。

②各メジャー・専修教員の意見聴取と分析から見えてきた改善すべき事項は以下のとおりである。

<哲学・歴史学メジャー>

哲学・歴史学メジャーでは2018年度のメジャー設立時に大幅な科目の削減・統廃合を行った。その結果、哲学分野に関しては、2018年度のメジャー設立時に多くのベーシック・アドバンスト科目の統廃合があったが、ある程度バランスのとれた科目の設置がなされている。しかし、歴史学分野では、人気の高い西洋史のアドバンスト科目が少なくなりすぎた観がある。2018年度から開始された新カリキュラムでは、東洋史系のアドバンスト科目が3科目(東洋文化史、中央ユーラシア史、歴史学特講C)とされたのに対し、西洋史は2科目(西洋文化史・歴史学特講A)とされた。

<表現文化メジャー>

2012年のカリキュラム改正に際して、なるべく内容がわかる科目名を目指したが、それでも尚、類似した科目名が並んで、学生にとってわかりにくくなってしまった部分がある。たとえば「日本文学特講」「日本古典文学講読」「日本古典文学作家作品論 A, B」など、科目名だけでは学生にとって内容が判然としない科目があり改善すべきである。

また、現在文芸創作関係の科目が非常勤講師によって担われ、そのボランティアな活動によって支えられている面があるので、この点も専任の実務家教員の配置を検討したい。表現文化メジャーは抱える教員も多く、全体としては多種多様な科目が置かれているといえるが、その多種多様な分野の中の限られた分野にだけ興味がある学生にとっては、案外、手薄で科目数が少ない。多種多様性を保ちながら、どのような分野に特に重きを置いていくのか等、近視眼的思考に陥らない、長期的ヴィジョンが必要とされる。

＜異文化コミュニケーション（英語）メジャー＞

バッキンガム大学が英語 DD プログラムとして提供できる学位コースの 2021 年度以降の内容が未定であるが、人文学部の英文学コースが有力な候補となる模様である。この場合、本学での準備コースとして、あるいは BU 科目の読み替え科目として配置していた科目については大幅に見直すことになる。まず、1.5 年から 1.75 年の留学期間となり、2 年生の 4 月に学生は英国に出発することからこれまで 2 年次春学期に開講していた「英米文学概論 II (DD 用)」「Academic Foundations for Humanities for DD」は廃止とする。従来の言語学系の科目やネイティブ教員による異文化コミュニケーション系科目については、必要がなくなるため、廃止するか大きく見直す必要がある。具体的な科目名としては、「英語学概論 I,II (DD 用)」「English in Society」「English in Institutions」「Mass Communication」「Global Communication」である。

＜異文化コミュニケーション（日本語）メジャー＞

国語科教員の輩出だけでなく、国内外の日本語教師（日本語学校や外国籍の子供を受け入れる小中高等学校の教師等）や地域日本語教育コーディネーターを輩出するとともに、教育実習の場所のさらなる確保とともに、次の 3 科目を担当できる教員の採用が必要と考える。

＜異文化コミュニケーション（中国語）メジャー＞

科目名から具体的な教育内容が伝わりにくいもの、例えば「中国語学入門」「中国語学概論」等の名称を検討する必要がある。体系化された教科の配置のことが、必ずしも学生に対し周知されているとはいえない現状もあるので、周知の方法を検討しなければならない。

＜異文化コミュニケーション（ロシア語）メジャー＞

ベーシックの語学系 16 科目については言えば、アドヴァンストの語学系 11 科目と同様に、一律に選択科目とされていること、② 2 年次の語学系 10 科目中 8 科目が 2 単位科目とされていること、という二つの点については、検討を要するものとする。

①については、大学で初めて出会う外国語の学修の場合、最初の 2 年間で少なくとも初級レベル（CEFR-B1 相当レベル）に到達させるためには、一般に、読む・書く・聴く・話す

の4能力にわたる科目を週当たり6コマの授業で系統的に学習させる、積み上げ方式のカリキュラム（個々の科目は必修科目とすることが必然的に求められる）が望ましい。

この点を踏まえ、学部としても、ロシア語の特修プログラム制度やロシア国立民族友好大学（モスクワ）を相手校とする文学部特別留学制度を導入するなどして、なるべく多くのロシア語専門科目を履修させようとする措置を講じたが、共通科目と合わせて週6コマのロシア語科目を履修する学生数の減少傾向に歯止めを掛けるにはいたらなかった。

②については、問題の2単位科目とは、2年次配当のロシア語文法初級Ⅰ・Ⅱ、ロシア語文法中級Ⅰ・Ⅱ、ロシア語講読入門Ⅰ・Ⅱ、ロシア語翻訳初級Ⅰ・Ⅱの8科目で、実際に準備学習に要する時間と負担を考慮して、語学系科目でありながら2単位科目としてきているものであるが、これらにさらにロシア語コミュニケーション中級Ⅰ・Ⅱと共通科目のロシア語Ⅲ・Ⅳとを加えて、合わせて週6コマ、計10単位のロシア語科目の履修を学生に求めることは、1セメスター当たりの履修登録総単位数に制限が設けられている中では、多彩な学びの機会を奪うことにつながりかねない。現状では、キャリア教育の重視など、多彩なベーシック科目が増やされる中、ロシア語メジャーへの進学を予定しながらも、週6コマのロシア語科目のすべてを履修することを断念せざるを得ない学生も出ているように思われる。

<国際日本学メジャー>

2018年度カリキュラムでスタートした新メジャーであり、全体に本メジャーの主張が十分には打ち出せていない状況にある。これは、既存の科目を活かす方向で、暫定的に科目編成を検討したことが大きい。国際日本学メジャーは海外との関わりにおいていかに現代日本が創造されてきたかをホリスティックに理解することを目標とする。ただし、提供する科目は、担当教員の専門に直結していることを重視し、必ずしもバランスよくカバーすることは第一目標としない。こうしたねらいが各科目および編成において十分に反映されているか、全体にアカデミックなものとなっているか、相互に連続的なつながりがあるかという点を検証する必要がある。

<社会学メジャー>

中学「社会」、高校「公民」の教員免許が取得でき、教職課程が必要とする科目が設置されている。また、必修科目である社会学概論以外に、26科目の選択科目があり、十分な科目が設置されている。その一方で、科目数が多く、履修者増などの理由で教員への負担につながっている可能性もある。たとえば、Ⅰ、Ⅱを提供している科目をⅠのみとするなど、教職科目の検討が必要である。

<社会福祉専修>

専修を希望する1年生は夏休みに専修の選抜をうけ、秋学期より専修をスタートする。この時点では専修志望者全員が社会福祉士国家試験の受験を志望している。しかし、学年の進行にともない、社会福祉士以外の社会福祉関連職や他の職種に進路を求め、国家試験受験を志望しない学生もあらわれてくる。国家試験を受験しない学生でも、専門として社会福祉専修での卒業を認めており、社会福祉を学んだといえる講義を提供している。ただし、上級

年次になると講義科目は施設などでの実習やそのための実習指導・演習などが多くなり、国家試験受験者とそうでない学生との間での行動や意識に差が生じている。また、専修学生の学生生活指導は4年生の2月の国家試験を念頭に行っているため、国家試験を受験しない学生への対応が必ずしも十分ではない。

なお、現在、社会福祉専修の教員の授業負担が大きい。社会福祉専門科目の授業が Semester あたり 4 コマ、これ加えて演習や卒業論文指導、(教員によっては) 大学院の指導が加わり、Semester あたり 10 コマ近くとなっている。さらに「相談援助実習」に関わる負担がある。学生それぞれの実習施設に対する実習依頼や実習巡回指導、事後のフォローなどが必要であり、同じ時期に複数の学生の施設実習が重なったり、年間を通してどこかで施設実習指導が行われていたりする。また実習は施設に学生指導の有資格者がいなければならないが、有資格者の転勤や受け入れ可能人数以上の実習志望がいるなどのため、施設の確保が困難な場合もある。実習施設の確保については教員や職員の努力によりこれまでなんとか確保できたが、より困難となっていくことも予想される。

③学生評価の課題

文学部における学生評価の課題を、教員の「学生評価の問題点」と「学生評価の工夫・対策」への自由記述の内容から考える。このため、KH Coder を用いてテキストマイニングを行った。分析の方法は、教員が回答した「学生評価の問題点」と「学生評価の工夫・対策」の記述からそれぞれ名詞の頻出語上位 50 位を抽出し、語と語の共起性をあらわす「共起ネットワーク」を可視化させて学生評価の課題を考察した。

はじめに、文学部教員がかかえている学生評価の問題点をみる。「学生評価の問題点」は「共起ネットワーク」としては、およそ 7 つのクラスターに分かれる (図 5-1)。各クラスターは完全に独立しているわけではない。たとえば、左上のクラスターの「グループ」は、中央左のクラスターの「人数」と共起性がある。以下は、各クラスター全体の内容を示すにとどめる。

左上のクラスターは、「ディスカッション」、「積極」、「反映」、「学習」、「グループ」の語群からなる。これらの語がどのような文脈でじっさいに記述されているかをみると、このクラスターは、グループディスカッションがかかえる問題点であることがわかる。本学部は、LTD などのアクティブラーニングを推進している。このクラスターが示しているのは、グループのディスカッションに学生をいかに積極的に参加させるか—という問題や、グループディスカッションをいかに成績に反映させるか—という問題であろう。

右上のクラスターは、「オムニバス」、「基準」、「講義」、「形式」、「統一」の語群からなる。文学部はいくつかのオムニバス科目を設置している。複数の教員が登壇するオムニバス授業は、学生にとっても興味関心が喚起されやすい授業形式である。しかし、このクラスターが示しているのは、複数の教員が授業に参加するなかで評価基準を統一することの難しさである。

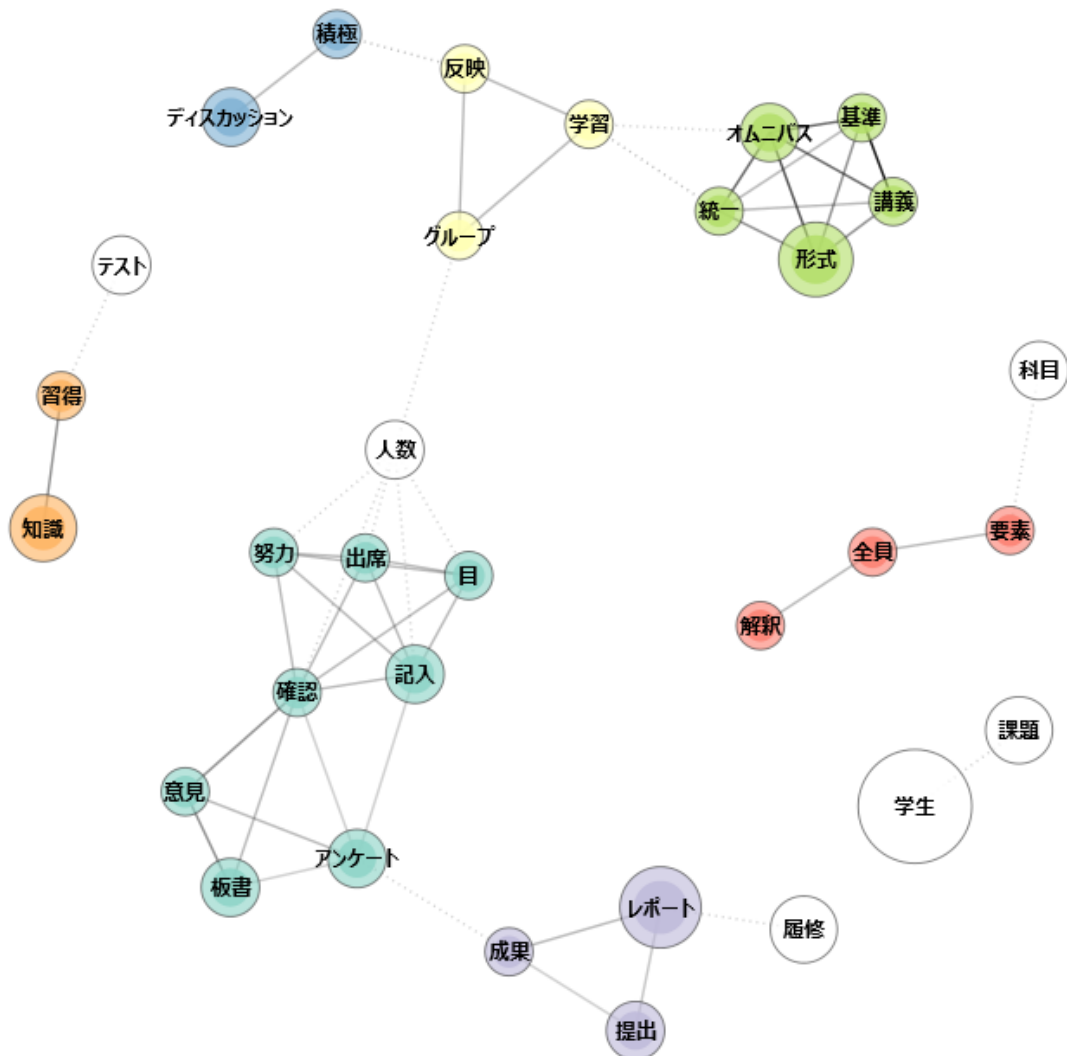


図 5-1 「授業評価の問題点」の「共起ネットワーク」(Jaccard 係数 0.25 以上)

これまで、オムニバス科目の評価基準については、とくに学部内で議論をしてこなかった。今後は、オムニバス授業の評価について、可能な範囲で学部内のコンセンサスを得ることが求められる。

左端上のクラスターは、「テスト」、「習得」、「知識」の語群からなる。このクラスターは、知識の習得がテストに反映されているのかという問題を示している。テストだけでは学習の成果があがらないために、レポートなどを課していると記述する教員も複数いた。しかし、小人数の授業ではきめの細かい対応も可能であろうが、大人数の授業では同等の対応は難しい。一律に決めず、履修人数によって知識習得の成果をどのように測定す

るか—という議論があってもよい。

中央左のクラスターは、「人数」、「努力」、「出席」、「目」、「確認」、「記入」、「意見」、「板書」、「アンケート」と最大の語群からなる。これらの語群は、人数の多寡によって学生の努力を評価することが難しくなるという記述から導き出されたものである。

中央右のクラスターは、「科目」、「要素」、「全員」、「解釈」の語群からなる。このクラスターは、相対評価に対する文学部教員の疑問があらわれている。たとえば、全員が素晴らしい成績を残したとしても、制度上、絶対評価で成績をつけることはできない。成績評価については、学内の統一基準があるため、文学部独自で成績評価の制度をつくることは困難であろう。しかし、最終的な成績評価の他に、授業内でさまざまな形で積極的に学生を評価することは意義があるだけでなく、文学部生の多様性を認めることにもつながると思われる。

中央下のクラスターは、「履修」、「レポート」、「成果」、「提出」の語群からなる。このクラスターは、レポートによる成績評価の妥当性への疑問と、課題を提出しない学生の存在の指摘がみられる。

最後に、右下のクラスターは、「学生」、「課題」の語群からなる。履修者の多さから定期試験のみで評価せざるを得ない状況や、多面的に評価したいが、課題を提出しない学生の成績が低くなってしまいう現状などが示されている。

3. 将来に向けた発展方策

(1) 効果が上がっている事項

本学部のメジャー制は学生が広く自由に学ぶことと深く学ぶことの両立をねらいとする体制であるが、一方で何をどう学んだらいいか迷い試行錯誤する学生もあり、そのことが学修意欲の低下に繋がりがねない懸念も存在する。現在行なっている履修相談、各種ガイダンス、研究室訪問、学業面談を一層細やかに実施できる体制を整えるとともに、シラバスの明確化や成績評価基準の明示などを含めて、各授業の内容を一層充実させていくことが重要であり、学部のカリキュラム検討委員会の常設化など具体的な方策とそれを可能にする組織的な取り組みを進めていきたい。

(2) 改善すべき事項

①カリキュラム・マップに示している本学部の各専門科目の配置が本学部の学位課程によりふさわしく、より学生の学修の指向や意欲に応えるための方策を、学生満足度アンケートの結果を踏まえて示す。

下記の表1はアンケート調査の自由記述の回答である。148名の記述内容のうち、名詞のみを抽出した頻出語である。文学部生は多様な背景をもった学生が多いため、少数意見をすくいあげることが重要であるため、1回のみでの出現回数の名詞も抽出している。これをみると、5回から10回の出現数を示した上位の頻出語は、「英語」、「心理」、「文化」、

「文学」、「日本」、「芸術」、「人」、「デザイン」、「科学」、「言語」、「古典」であった。このうち、「デザイン」、「科学」は現在の文学部のカリキュラム・授業ではあつかっていない領域である。新カリキュラムに向けて、これらの科目の設置について検討する。

表1 「希望するカリキュラム・授業」の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
英語	10	地方	2	外国	1
心理	10	中国	2	格差	1
文化	10	哲学	2	学科	1
文学	9	特	2	学芸	1
日本	7	内容	2	学際	1
芸術	6	博物館	2	学生	1
人	6	美術	2	感じ	1
デザイン	5	表現	2	環境	1
科学	5	文法	2	韓国	1
言語	5	履修	2	希望	1
古典	5	理論	2	機会	1
コース	4	アート	1	起業	1
コミュニケーション	4	アニメ	1	共有	1
メジャー	4	アニメーション	1	教職	1
演劇	4	イングリッシュ	1	近代	1
教育	4	エジプト	1	具体	1
現代	4	オール	1	経済	1
作品	4	カルチャー	1	検	1
歴史	4	クラシック	1	検定	1
教授	3	スキル	1	交流	1
研究	3	スタイル	1	構造	1
考古学	3	スペイン	1	考え	1
社会	3	スポーツ	1	講習	1
上級	3	ネイティブ	1	合唱	1
政治	3	フランス語	1	座	1
文学部	3	ヘルス	1	作家	1
マーケティング	2	ポップ	1	司書	1
ロシア	2	ポピュラー	1	子ども	1
映像	2	マネジメント	1	思慮	1
音楽	2	マンガ	1	視点	1
活動	2	マンツーマン	1	資格	1
観点	2	ミュージカル	1	取得	1
関係	2	メディア	1	宗教	1
関連	2	ユニバーサル	1	就職	1
基礎	2	ヨーロッパ	1	習慣	1
基本	2	ラテン語	1	集中	1
強化	2	リスニング	1	常識	1
教養	2	レッスン	1	心情	1
語学	2	意味	1	新設	1
国	2	医療	1	神話	1
児童	2	一環	1	人間	1
実践	2	影響	1	人数	1

充実	2	英	1	人物	1
色彩	2	演習	1	人文	1
世界	2	応用	1	図書館	1
設置	2	横断	1	制作	1
専門	2	欧米	1	精神	1
創作	2	課程	1	西洋	1
想像	2	解析	1	先生	1
対策	2	開設	1	専修	1

次に下記の図1は、「希望するカリキュラム・授業」として回答のあった自由記述における名詞の上位40位の頻出語の共起関係を示したものである。大小10のクラスターに分かれるが、とくに目立つ4つの大きなクラスターにみる頻出語の共起関係から、文学部生が希望するカリキュラム・授業を素描してみる。

まず中央上のクラスターをみると、このクラスター下側では、「科学」が「哲学」と「社会」に共起しており、学生が科学と哲学・社会とを関連付けた内容を志向していることがわかる。また、同じく中央には「人」「デザイン」「色彩」「観点」などの語が共起しており、学生が「人」と「デザイン」「色彩」などの関連領域に関心をもっていることが示されている。そして、同じく上左側には、「現代」「関連」「音楽」などの語が共起している。

これは、学生がさまざまな文学部的な科目内容や関心の高い音楽を、現代と関連付けて学びたい志向性を示していることが読み取れる。さらに右上には「言語」と「コミュニケーション」が共起しており、言語の学習がコミュニケーションの達成に昇華できるような授業の志向性がうかがえる。

次に、右上のクラスターである。このクラスターでは、中央に位置する「研究」が「創作」「映像」「児童」「政治」などの語に共起している。これらのなかでも「創作」「映像」は表現文化メジャーの学生だけでなく、多くの文学部生が興味関心をもつ分野であることがわかる。今後のカリキュラム改訂では、積極的に「創作」「映像」領域の授業を設置したい。

続いて、左下のクラスターをみてみよう。左上に位置する「文化」と国の共起は、文学部生が地域研究のなかでも文化研究を志向していることがうかがえる。また、「ロシア」と「上級」の共起は、ロシア語の高度の授業設置を望む意見である。同じく「中国」と「語学」の共起も中国語科目の充実を望む声であった。さらに、「歴史」の「充実」が共起しているのは、哲学メジャーと歴史学メジャーが合併したことによって、歴史系の科目数が減ったことに対する改善への期待である。

最後に、中央下のクラスターである。「日本」と「古典」「文学」の共起は、日本の古典文学や近現代文学関連の科目設置を望む学生の声である。また、「作品」「世界」「教養」との共起は、ジブリ作品や世界の文学作品を教養として学ぶことのできる授業設置を学生が指向していることを示している。

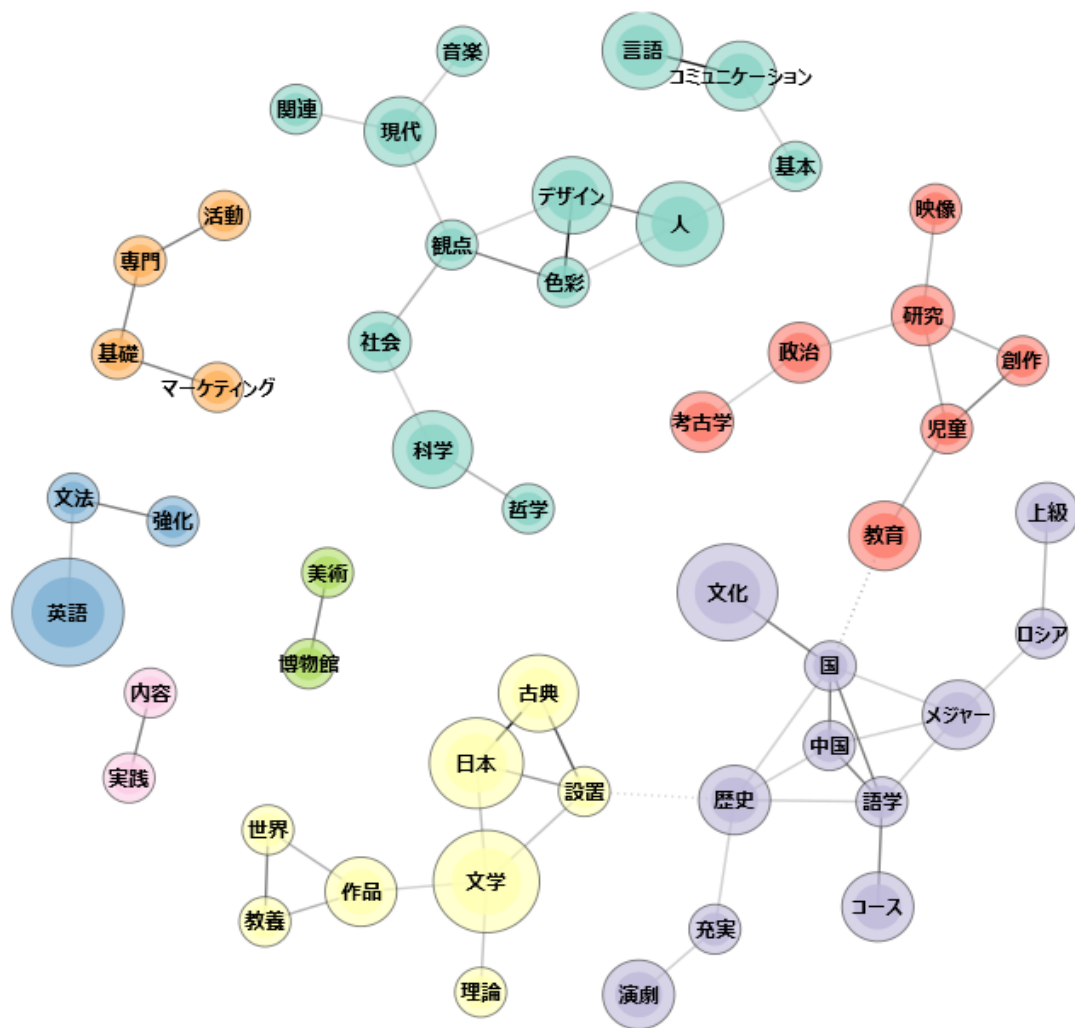


図1 「希望するカリキュラム・授業」内容の共起ネットワーク

今回のアンケート調査では、実施時期の問題もあり、十分な周知がなされなかったため、247名の回答にとどまっている。今後は、「初年次セミナー」の後半や、「文学部の学びとライフデザイン」など、多くの履修者をもつ授業の一環としてアンケートを実施することが望まれる。しかし、247名の限定的な回答であっても、表1および図7が示すように、文学部生が志向するカリキュラム・授業の素描は可能である。今後も、学生の満足度・理解度を重視し、学生の意見・志向をとりいれながら、カリキュラムポリシーの自己点検を怠らず進めていきたい。

②教員の意見聴取と分析を踏まえたメジャー・専修ごとの将来に向けた発展方策を示す。

<哲学・歴史学メジャー>

歴史学分野で、新カリキュラムのアドバンスト科目が多く開講される20年度以降の履修者数の推移を見る必要があるが、もし平均で50名以上となると、アドバンスト科目として

は履修者が多くなりすぎ、専門性の高い教育を十分に行えないことが懸念されるため、その場合には次のカリキュラム改訂で科目の新設をして科目数を増やしたい。また日本史系の「日本近世・近現代史概説」は、現行ではアドバンスト科目であるが、他の「概説」科目がすべてベーシックとなっているので、それに合わせてベーシック科目に移行する。このほか高等学校で2022年度から日本史と世界史の近現代史を総合的に学ぶ「歴史総合」の教育が開始される予定であり、それに合わせて大学においても近現代史を総合的に学ぶ授業を開設したい。

<表現文化メジャー>

1)DDコースの変更への対応として、以下の5科目に限り2020年度から2年次配当を1年次配当にした。「英米文学概論Ⅰ」「英米文学概論Ⅱ」「イギリス古典文学史」「イギリス近代文学史」「アメリカ文学史」。また、次のカリキュラム改定の際、同じくDDコース関連の対応として「英米文学講読Ⅱ」を「英米文学講読Ⅰ」と同様、1年次配当としたい。

2)海外からの招聘教員による「Special Lecture A, B」は2年生配当になっているが、EMP科目は英語のできる学生は1年生から履修できる方がよいと思われるので、1年生配当を検討する。

3)講読の授業は早い方がよいと考えられるので、3年生配当となっている「ロシア語文学講読Ⅰ,Ⅱ」は2年生配当を検討する。

<異文化コミュニケーション(英語)メジャー>

DDコースへの対応として、従来の言語学系の科目やネイティブ教員による異文化コミュニケーション系科目「英語学概論Ⅰ,Ⅱ(DD用)」「English in Society」「English in Institutions」「Mass Communication」「Global Communication」に変えて、上記の表現文化メジャーの発展方策で記した文学系科目の配当年次引き下げを行なう。また「LiteratureⅠ,Ⅱ」についてはネイティブ教員によるイギリス(を中心とした)文学の講義を継続することが必要となるため、後任のネイティブ教員を配置したい。

次に、現在、学部として40科目の英語科教職科目が設置されているが、免許取得に必要な単位数は中学30単位、高校34単位であり、多目になっている。もう少し絞り込むことや科目を加えることで、英語科教員としてのさらなる指導力・技術を身につける機会を広げたい。また、「演劇入門」を1年次配当にして教職生として基本的な文学に関する知識を身につけさせ、興味を持つ学生にはさらに専門知識を深めるために「イギリス古典文学史」等を履修させたい。また、パラグラフ・ライティングの「Academic Writing AI,Ⅱ」とエッセイ・ライティングの「Academic Writing BI,Ⅱ」については、DD生と教職学生には1年次で両方を履修できるようにしたい。教員採用試験を受ける学生は英検準1級レベルの英語力が求められているからである。

その他、体系性をより明瞭にするため、「異文化コミュニケーション」を「異文化コミュニケーション入門」とし、その上級科目として「Intercultural Communication」や「Comparative CultureⅠ,Ⅱ」などが配置されるようシラバスの見直しや学生への提示の仕

方を考える必要がある。また、DDコースの変更に際して「Teaching English for Academic Purpose」の名称については、今後バッキンガム大学では、本学の学生はこの科目を履修しないことから、内容に即した科目名に変更したい。

＜異文化コミュニケーション（日本語）メジャー＞

国語科教員の輩出だけでなく、国内外の日本語教師（日本語学校や外国籍の子供を受け入れる小中高等学校の教師等）や地域日本語教育コーディネーターを輩出するためにも、教育実習の場所のさらなる確保とともに、次の3科目を担当できる教員の採用が必要と考える（広島大学の科目名参考）。1. 地域日本語教育、2. 年少者日本語教育、3. 多文化共生論「地域日本語教育」は、学部生が地域の市役所などで国際交流の支援（地域日本語教育コーディネーター）ができる人材を輩出することにつながる。また、通学部の科目は通教の科目と連動しているため、通教部の学生からすると地域日本語教育（ボランティア）が学習動機が大きくなっているため、その点においても必要と思われる科目となる。

「年少者日本語教育」は、現在も日本語特講Aの内容に含まれているが、特講は内容を担当者が自由に設定できる科目でもあるので、その自由度を残しておきたいと考え、別科目として設定したい。

「多文化共生論」は、日本語教育全般が多文化共生に関わることもあるし、日本国内における多文化共生はキーワードでもあるので、地域の生活者としての外国人との共生、学校における児童生徒との共生など広げて講義をすることも可能と考え、用意したい。

＜異文化コミュニケーション（中国語）メジャー＞

今後メジャー内で検討し、学部のカリキュラム検討委員会と連携しながら、学生に内容がより分かりやすい科目名に変えると共に、メジャーのカリキュラムポリシーの体系性を履修相談やガイダンスの際に周知するなど、具体的な方法を検討・実行していきたい。

＜異文化コミュニケーション（ロシア語）メジャー＞

2018年のカリキュラム改訂に際し、この問題についてメジャー内で検討した結果、当該の選択科目の必修化については見送ることとし、これに替えて、新たに一年生を対象とする夏季短期語学研修をロシア国立ゲルツェン教育大学（サンクトペテルブルグ）で行うなど、現行制度の枠内で履修者の誘導に可能な限り努めてゆくことになっている。また、準備学習に要する時間数には見合わないものの、週6コマのロシア語学習を確保するために、次回のカリキュラム改訂で1単位科目にする可能性についても検討していきたい。

＜国際日本学メジャー＞

点検・評価において触れた検証を進めつつ、本メジャーの将来に向けた発展方策を日本語コースと英語コースに分けて示す。

◇日本語コース*の場合：（*便宜的に日本語で行う科目について日本語コースと呼ぶ）

（1）現状の国際日本学のイントロダクトリー科目「国際日本学への招待」は、言語・文化にほぼ特化している。より広く文化一般・社会・歴史・哲学などをカバーするとともに、1年生向けのよりわかりやすい「国際日本学への招待」に内容を組みかえたい。なお、形式は

現状と同様にオムニバスとし、担当者も一部以外は現状を維持する。

(2) (1) に続くベーシック科目に「国際交流と日本社会」がある。この科目は社会・哲学等にほぼ特化している。今後は1に続くもう一つのベーシック科目として、日本語・日本文学・日本文化一般を中心とした、仮称「国際交流と日本文化」を新設し、「国際交流と日本社会」の双方を受講することで、国際日本学の大枠が見えるような編成にしたい。

(3) ベーシック科目「社会で通用する日本語」は、時間割との関係か現在230名程度の履修者がいる。細かな指導が必要であるのと、今後は1~3年生も受講が可能となるのに伴う増加が予想されるため、国語科・日本語教育に関わる教員の参画を推進する。

(4) アドバンストについては、ここまでの(1)~(3)をふまえた仮称「国際交流と現代日本」という科目を新設し、メジャーの総括を示したい。

(5) 現状のアドバンスト科目の「ディベート日本学」(日英語半々)は学生の英語力の現実に基づき、日本語専用と英語専用のディベートのクラスに分ける。すなわち、日本語コースのものは「日本語によるディベート日本学」とし、英語コースのもの(=EMP科目)は「英語によるディベート日本学」とする。双方のテーマを共通にすることで、言語により見えてくるものの相違を考えるきっかけとしたい。こちらも上記(1)(2)(4)と連続する。

(6) 上記以外のアドバンスト科目として、日本学の観点に基づいた仮称「現代の若者文化」、仮称「現代日本人の思想」、あるいは仮称「地政学的／考古学的に見た日本」などの科目を新設したい。これは若手教員の有志によるものとし、各教員の専門性を活かした科目としたい。必要なら、現在若手教員の担当科目の応援を非常勤講師に依頼することも検討していただきたい。

(7) オムニバス科目の担当にあたっては、各教員が現在1科目ずつ担当している科目を、複数の教員が共同で1科目を担当とすることにより、1人当たりの担当コマ数を削減するといった方策を、今後検討したい。

◇英語コース(=EMP科目)の場合：

(1) 国際日本学にふさわしい、アカデミックな科目が十分に開講されていないという不満が学生から出ており、この点をふまえて改善を試みる。科目全体のレベルは、日本語コース・英語コースともに、同等であるか検討し、それが保証できるようにしたい。

(2) 現状のバイリンガルの「ディベート日本学」については、日本語コース5で記したように、仮称「日本語によるディベート日本学」と仮称「英語によるディベート日本学」に分けて新設したい。ディベートにおいて必要な人員は、問題提起を行う教員と、ディベートの仕方を教えるディベートの専門家(非常勤講師)の双方が必要である。

(3) (2)を活性化させるような基礎をイントロダクトリー、ベーシック科目で固める。イギリスで用いられる、教科書に準じるテキストに基づいて、読解・議論・レポート執筆を行う、あるいは主要な新聞のコラムなどをはじめとする記事を批判的に読み、討論する、といった内容となるよう科目のシラバスを再検討する。アドヴァンスト科目についても、さらに検討を進める。

(4) 近年、学生は一つの専門的な学問を目指すよりも、様々な分野から自分および日本の「現在」を知り、考えることを好む傾向がある。このことは社会・哲学・歴史・文学・語学等のいずれによらず、ホリスティックな観点から考える傾向を示唆する。国際日本学では、アドヴァンスト科目までホリスティックな観点から、知的刺激を与える姿勢を維持したい。また、世界から見た日本という概念に学生の関心が高まっている。このことは勉学の一つのきっかけとなっているが、同時に危険性もはらむ。グローバルとローカルの問題も再考する必要がある。この点は現状の科目ではディベート日本学で取り上げているが、それだけで十分か、さらに検討する。

また、国際日本学の科目を通じて、学生は複数の教員と一緒に参加する授業を好む様子が観察されてきた。これは専門分野が違うことに伴う視点の相違が可視化するためである。この点を今後は重視し、複数の教員が同じ講義で関わる授業形態の可能性を検討したい。さらに、教員の専門性と研究領域および研究の進捗を重視し、アピールしていく必要がある。

<社会学メジャー>

教職科目については、現在十分な科目数があるので、必要に応じて統合を検討する。

また、高校時代の社会科のイメージによるのか、受験時、1年入学時に社会学メジャーを希望する学生は少ない。その点ではより魅力的な科目や科目名の検討が求められる。今回のカリキュラムで追加されたサブカルチャー論、映像の社会学などのように、若い学生が興味を抱きそうな科目の設置をさらに検討していく必要がある。履修者が少ない科目(社会調査士資格に関連する科目など)は一部合併することも視野に入れ、検討していきたい。

<社会福祉専修>

専修学生の学生生活指導は4年生の2月の国家試験を念頭に行っているため、国家試験を受験しない学生への対応が必ずしも十分ではない場合が生まれる。社会福祉専修の学生数はそれほど多くなく、授業やガイダンスなどで学生と教員・職員との交流も多いため、そうした学生へは個別に対応しているが、今後一層の配慮をしていきたい。また、20名の定員を越える専修の希望者がある年度があり、社会福祉専修に入れなかったために社会福祉士の受験を得られない学生や保育士介護福祉の仕事につきたいと思っている学生など、社会福祉に関心を持っていて社会福祉専修以外に所属する学生に対する対応も検討したい。

また、本専修では新旧複数のカリキュラムが進行中である。開設当初、国家試験受験のためのミニマムな開講科目で2013年にスタートしたが、2018年度に国家試験科目の全てを開講したカリキュラムに改訂して同時進行している。さらに2021年4月には、厚生労働省の社会福祉士のカリキュラム改定に対応した新しいものが加わるので、3つのカリキュラムが同時進行することになり、一層適切な対応が必要となっている。実習施設の確保を含めて、今後具体策を検討・実施していきたい。

③学生評価の問題に対して、教員がどのように工夫・対策をしているかをまずみる。「学生評価の工夫・対策」も、大小7つのクラスターに分かれる(図5-2)。すでに「学生評価

の問題点」でもふれたように、各クラスターは完全に独立しているわけではない。以下では、各クラスター全体の内容を示すにとどめる。

左上に位置しているクラスターは、意見、留学生、学生、授業、提出の語群からなる。

ここでは、授業の活性化、多様な評価のありかた、課題提出の事前告知の工夫・対策が示されている。たとえば、留学生が SA として英語関連の授業に参加し、日本人学生に良い影響を与えたこと、多様な評価のあり方を志向し「定期試験コース」「定期試験レポート併用コース」のいずれかを選択すること、授業内で評価基準を明示すること、課題について早めに授業とポータルサイトで告知すること一などの記述がみられた。

中央上のクラスターは、コース、レポートの語群からなり、レポートの多様な成績評価の可能性が検討されている。たとえば、上述の評価の選択制の検討にくわえ、レポートだけでなく中間試験を実施すること、授業内で優れたレポートを紹介すること一などがあげられている。中央右のクラスターは、自分、確認、最終、成果、内容、グループ、予習一と最大の語群からなり、①どうすれば学生が評価内容を確認できるか、②グループ学習をいかに活性化させるか一への工夫・対策が記述されている。①では、授業中に優れているレポート・課題の評価点を具体的に示す、課題で授業前後の変化を記入させる一などの工夫・対策がみられた。②では、あらかじめディスカッションのテーマを前の授業内で提示しておく、予習したディスカッションのテーマをグループで共有する一などの工夫・対策がみられた。

左下のクラスターは、履修、カード、発言、科目の語群からなる。ここでは、授業中に発言した学生にカードを配布し、氏名・学籍番号を記入してもらい、評価に加点するという実践例が紹介されている。中央下のクラスターは、検討、人数、機会、実施、加点の語群からなり、成績評価と加点を一履修人数・機会・実施の問題をかかえながらどう行うかが記述されている。たとえば、授業中に成績評価の内容を学生に提示する、履修者のなかで希望者に課題を提出してもらい、それに対して加点する。記述テストの導入、履修人数に適合した授業運営の方法を検討する一などの実例があがっている。

最後に、中央右から下に位置するクラスターは、成績と課題からなる。ここでは、課題が成績に占める割合の高さから、いかにそれを学生に周知するかが検討され、初回の授業時に強調することなどがあげられている。

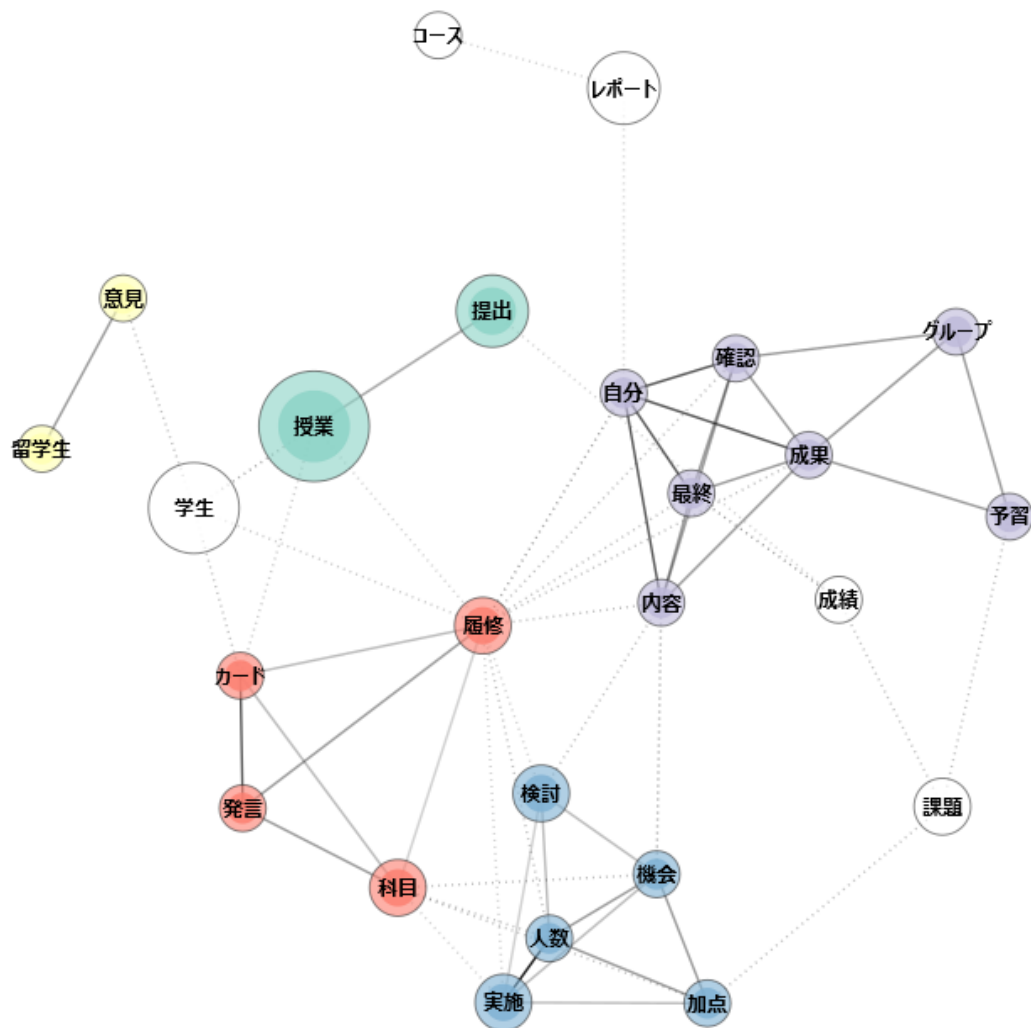


図 5-2 「授業評価の工夫・対策」の「共起ネットワーク」(Jaccard 係数 0.20 以上)

以上、「ディプロマ・ポリシーと授業評価に関する教員アンケート」の分析と課題を示した。本分析によって示された課題を解決し、教員の円滑な授業遂行と文学部生の授業満足につながる「共起ネットワーク」における語間の共起関係は、語どうしの近接性ではなく、相互に線で結ばれているかどうかで決定される(樋口 2014: 155)。そして、線分の太さが共起関係の強さを表し、出現回数が多ければ多い語であるほど、円のサイズが大きくなる(樋口 2014: 157)。これらを踏まえ、今後学部として寄り組織的な改善の取り組みを行なっていきたい。

4. 根拠資料

- 1) 2019 年度履修要項
- 2) 2019 年度「ディプロマ・ポリシーと授業評価に関する教員アンケート」
- 3) 2019 年度秋学期の授業アンケート結果
- 4) 各ゼミ「学びの集大成」

5) LOs 評価ルーブリック (2019 年度履修要項)

6) 演習および論文評価目のルーブリック

<点検項目>

V. 学生の受け入れ

1. 現状の説明

① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

すでにアドミッション・ポリシーを定めて学部ホームページ等で公表し、各入試種別ごとに適用しているが(根拠資料1)、新しい入試制度の実施に合わせて学部として必要な改正を行っていく。

昨年度はAO入試(パスカル入試)において、学部としての応募条件に英検準2級(または同レベルのTOEICスコア)を可能とし、本年も継続することにした。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

パスカル入試で求められるのは授業を活性化できるリーダーシップのとれる人材であり、英語力がある人材ではない。一方、パスカル入試受験の条件は調査書の評定平均値3.5以上であり、学業成績はある程度担保されていると考える。事実、他の学部の数倍の受験生が文学部のパスカル入試に応募しており、選ばれた優れた人材が合格し、授業を牽引してくれている感がある。この入試は文学部においては成功したといえる。

(2) 改善すべき事項

公募入試の調査書の評定平均値は3.0以上であり、筆記試験は英語・国語・数学の中から選択となっているので、以前のように英語力がある受験生が合格するとは限らない。しかし、文学部の指針のひとつは「人類を結ぶ世界市民たれ!」であり、学部としては語学力のあるグローバル人材を多く輩出したいと考えており、そのための具体的な方策が必要である。

3. 将来に向けた方策

(1) 効果が上がっている事項

パスカル入試は新入試制度の下でも継続されるので、学部HPやオープンキャンパス等の機会にこの入試制度の魅力と意義についてさらに積極的に広報していく。

(2) 改善すべき事項

入学後に英語の6単位習得が本学の卒業要件となっているが、公募推薦入試では英語を受験することなく入学できるため、英語の調査書のスコアや入学時に実施されるプレイスメントテスト(TOEIC英語試験)の結果をみながら、現状のままでいいのか、学生の受け入れ方針について慎重に検討していく。

4. 根拠資料

1) 文学部 HP および 2019 年度履修要項

<点検項目>

VI. 教員・教員組織

1. 現状の説明

① 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

大学として求める教員像については、大学の倫理綱領に示されている。学部の教員組織の編成に関する方針としては、学部長、副学部長（1名）、各学問領域に合計5人の学部コーディネーター、および各メジャー・専修に責任者（計9名）を置くこと、さらに教務委員会（＝コーディネーター会議）、広報委員会、キャリア委員会、教職委員会等の10の学部委員会を設置することを明示している。（根拠資料1）

新たな教員の採用（非常勤講師を含む）、昇任、テニユア移行については、大学が求める条件の他に、学部として必要な条件を人事委員会やコーディネーター会議で検討し、教授会で決定し明文化している。公募のさいは応募条件および審査の進め方をネット上に公表している（根拠資料2）。今後さらに学部の理念・目的に照らしてよりよい教員組織の編成を検討していく。2018年度も2019年度も公募を行ったが、応募数も多く、優れた人材を採用することができたと考えている。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

(2) 改善すべき事項

教員サイドとして組織的に取り組むべき事項が増えるにしたって学部の教員組織を重層化してきているが、会議やそれに向けた準備の増大などが、各教員の教育・研究上の負担になっている面があり、改善が必要である。

3. 将来に向けた方策

(1) 効果が上がっている事項

(2) 改善すべき事項

各教員の研究と教育のための時間確保とその他の必要な業務のバランスを、コーディネーター会議やメジャー責任者会などで定期的に検証し、効率化と不要な業務の洗い出しを行なう。

4. 根拠資料

- 1) 創価大学学則および創価大学文学部教授会資料
- 2) 文学部 HP

<点検項目>

Ⅶ. 学生支援

1. 現状の説明

② 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

学生支援は基本的には大学全体の取り組みとして行なわれており、学部としてはその枠組みのなかで、授業運営費を活用した SA の配置、学外講師の招聘、教職生大会開催、語学研修の効果測定試験援助等の他、予算措置はないが、履修相談会、学業成績不振者面談、学部インターンシップの運営等を実施している。またアクティブ・ラーニングの推進をはじめとする学習支援については点検項目Ⅳで記したとおりである。

こうした学生支援は、教員・職員の個々の自発性によるだけでなく、学部として組織的に行なっており、その体制は十分とはいいがたいが、適切に行なわれている。今後とも、予算の範囲内で、アンケート等を通して学生の意見・希望を聴きながら、学生支援のために学部としてさらにできることがないか検討していく。アンケートの中で「人間学」「文学部の学びとライフデザイン」のために、特別に呼びたい講師についての意見・希望もさらに聴いていく。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

年に5回ほどあるオープンキャンパスの手伝いのために毎回30～50名の学部1,2年生がボランティアで集まってくれている。文学部を誇りに思い、文学部に受験生を導いてくれている有難い学生たちである。この中から初年次セミナーをはじめとする授業の SA をしてくれている学生が多く出てくれている。

(2) 改善すべき事項

3. 将来に向けた方策

(1) 効果が上がっている事項

学生が学生を支援するというのが本学・本学部の良き校風の1つであり、今後こうしたボランティア精神溢れる学生達をさらに組織的に学生支援に当たってもらえるよう、学生トニ尾学部協議会等の場を通じて店頭・実行していきたい。

(2) 改善すべき事項

4. 根拠資料

<点検項目>

IX. 社会連携・社会貢献

1. 現状の説明

② 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

社会連携・社会貢献に関する方針は、大学全体として社会連携ポリシーを定めている。(根拠資料1) 学部における活動もこれにもとづいて行なっており、今のところ学部としてこれに関する方針は特に定めていない。

現在、学部としては個々の教員や幾つかの授業科目において、八王子学園都市大学公開講座や、学外者が参加可能な学内講座を行なっている。また「人間学」や「文学の学びとライフデザイン」「表現文化論入門」などで実務家の学外講師を積極的に招いて講義してもらっている。これらは学生の毎回の授業への感想などから学生の教育効果という点では一定の成果を上げていることが分かる。一方、教育研究成果の社会への還元という点ではま、本学が開学間もない頃から開催し伝統となっている「夏季大学講座」は地域や広く全国の市民に開放された学外講座であるが、これにおいても本学部の教員が多く講座を担当し、教育研究成果の社会を還元するという課題に応えることができている。また社会福祉系の教員のゼミを中心に、若者の居場所づくりなどの地域や社会の課題に応える活動も行なっている。しかし、社会連携とそれによる教育研究成果の社会への還元という点では現状はいまだささやかなものである。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

(2) 改善すべき事項

社会連携および教育研究成果の社会への還元に関する方針を学部として定めていない。そのため、その活動は個々の教員の自主性に委ねられているのが現状であり、今後のこうした活動の重要性を鑑み、改善されるべきである。

3. 将来に向けた方策

(1) 効果が上がっている事項

(2) 改善すべき事項

社会連携と教育研究成果の還元に関する方針を学部として方針を定め、それに基づいた組織的な取り組みを実行するため、コーディネーター会議やカリキュラム検討委員会を中心に、検討し、どのような活動が必要か、可能かを組織的に協議、決定していく。またその場

で、各授業における実務家教員や実務家の積極的な招聘についても検討していく。

4. 根拠資料

- 1) 創価大学社会連携ポリシー